

# 日本西洋史学会

## 第 60 回大会

### 報告要旨集

(訂正版)

2010年5月29日(土)・30日(日)

別府大学

# 日本西洋史学会第60回大会

## 報告要旨集

2010年5月29日(土)・30日(日)

別府大学

MINERVA西洋史ライブラリー

既刊 A5判上製カバー

### スイス独立史研究

瀬原義生著 独自の社会体制に至った過程をあらためてたどる。6300円

### 近代フランスの歴史学と歴史家

渡辺和行著 ●クリオトナシヨナリズム 実証主義史学を再評価。6300円

### ヴィクトリア朝ロンドンの下層社会

ヘンリー・メイヒュー著 松村昌家／新野 緑編訳 4830円

### 初期コミンテルンと在外日本人社会主義者

山内昭人著 ●越境するネットワーク 実態を現地資料から解明。6825円

### 文明の作法

木村俊道著 ●初期近代イングランドにおける政治と社交 6825円

### 歴史の場

若尾祐司／和田光弘編著 ●史跡・記念碑・記憶 6825円

### 50のドラマで知るヨーロッパの歴史

M・マイ著 小杉冠次訳 ●戦争と和解、そして統合へ 3150円

### オックスフォードヨーロッパ近代史

T・C・W・ブランニング編著 望田幸男／山田史郎監訳 4200円

### イギリスの近代・日本の近代

村岡健次著 ●異文化交流とキリスト教 5250円

### コーヒーのグローバル・ヒストリー

小澤卓也著 ●赤いダイヤか、黒い悪魔か コーヒーが結ぶ世界。3150円

### 日系カナダ移民の社会史

末永國紀著 ●太平洋を渡った近江商人の末裔たち 6825円

### 集団人間破壊の時代

S・パワー著 星野尚美訳 ●平和維持活動の現実と市民の役割 5040円

イギリス帝国と20世紀(全5巻)

各3990円

①パクス・ブリタニカとイギリス帝国 秋田茂編著

②世紀転換期のイギリス帝国 木村和男編著

③世界戦争の時代とイギリス帝国 佐々木雄太編著

④脱植民地化とイギリス帝国 北川勝彦編著

⑤現代世界とイギリス帝国 木畑洋一編著

⑥シリース・アメリカ研究の越境(全5巻)

①アメリカの文明と自画像 上杉忍／巽孝之編著 3675円

②権力と暴力 古矢旬／山田史郎編著 3675円

③豊かさの環境 秋元英一／小塩和人編著 3675円

④個人と国家のあいだ(家族・団体・運動) 久保文明／有賀夏紀編著 3675円

⑤グローバリゼーションと帝国 紀平英作／油井大三郎編著 3675円

⑥文化の受容と変貌 荒このみ／生井英考編著 4410円

近代ヨーロッパの探究 好評既刊

①移民 3780円 ②教会 4410円 ③国際商業 4410円 ④ジェンダー 4725円

⑤家族 3990円 ⑥スポーツ 4410円 ⑦民族 4725円 ⑧軍隊 4725円

概説 西洋法制史 勝田有恒／森 征一／山内 進編著 3360円

ローマ法とヨーロッパ P・スタイン著 2940円

ローマ法の歴史 屋敷二郎監訳 関 良徳／藤本幸二訳 U・マンテ著 2625円

近世・近代ヨーロッパの法学者たち U・マンテ著 3675円

西洋の歴史 基本用語集 古代・中世編 朝治啓三編 基本的な用語を983項目を収録。2310円

西洋の歴史 基本用語集 近現代編 望田幸男編 人名343項目、事項610項目収録。2100円



〒607-8494 京都市山科区日ノ岡堤谷町1 ☎075-581-0296 宅配可/価格税込  
E-mail eigyo@minervashobo.co.jp URL http://www.minervashobo.co.jp/

## 目次

### 《大シンポジウム 世界史教育の現状と課題》

#### 〈ビーコンプラザ フィルハーモニアホール〉 (13:30 - 17:00)

|                                    |   |
|------------------------------------|---|
| 問題提起と提言：鶴島博和（熊本大学）                 | 2 |
| 世界史教育の現状と課題：高等学校から大学への一貫した歴史教育を求めて |   |

#### 第 I 部 高等学校における世界史教育

|  |   |
|--|---|
| 1. 吉嶺 茂樹（北海道立札幌北高等学校）  |   |
| 高等学校における世界史教育の現状と課題—『学びの崩壊』と称される困難校で、『それでも世界史が好き』と言ってもらうために— | 3 |
| 2. 西 裕一郎（大分県立森高等学校）  |   |
| 社会（歴史）事象を読み解く世界史授業実践   | 4 |

#### 第 II 部 大学における歴史教育

|                           |   |
|---------------------------|---|
| 1. 深沢 克己（東京大学）            |   |
| 高校世界史と大学の歴史教育とを結ぶもの       | 5 |
| 2. 桃木 至朗（大阪大学）            |   |
| 歴史学と歴史教育の再生をめざして—阪大史学の挑戦— | 6 |

### 《自由論題報告》

#### A 古代史部会 I 〈34号館 115教室〉 (10:00 - 12:10)

|   |    |
|---|----|
| 10:00-10:40 長谷川 敬（リヨン第二大学・東京大学・院）                                       |    |
| 帝政ローマ前期ガリアにおける商人と地方貴族の紐帯—河川水運業者組合『外部』パトローヌスの検討を中心に—                     | 8  |
| 10:50 - 11:30 福山 佑子（早稲田大学・院）  |    |
| 古代ローマにおける墓碑の改変  | 9  |
| 11:30 - 12:10 山本 興一郎（日本大学・院）  |    |
| 三人委員統治前期における『故ユリウス・カエサル』利用の一側面—Sex. ポンペイウスによる故ポンペイウスと海神ネプトゥヌスの利用を手がかりに— | 10 |

#### B 古代史部会 II 〈34号館 213教室〉 (9:20-12:10)

|  |    |
|--|----|
| 9:20 - 10:00 小河 浩（広島商船高等専門学校）                |    |
| 前360年代のトラキアにおけるアテナイ人イピクラテスの活動                | 11 |
| 10:00 - 10:40 奥山 広規（広島大学・院）                  |    |
| 東地中海地方都市ティール出土碑文資料における字形の変化—碑文非文字情報研究の成果と展望— | 12 |
| 10:50 - 11:30 青木 真兵（関西大学・院）                  |    |
| 元首政初期レプキス・マグナの都市発展—前20年のガラマンテス遠征を通じて—        | 13 |
| 11:30 - 12:10 井福 剛（同志社大学・院）                  |    |
| ローマン・アフリカの文化とローカル・エリートトウツガにおけるガビニウス家を中心に—    | 14 |

#### C 古代・中世史部会 〈34号館 214教室〉 (9:20 - 12:10)

|   |    |
|---|----|
| 9:20 - 10:00 長谷川 宜之（青山学院大学・兼）                   |    |
| 5世紀前半の北アフリカの農村における正統派司教の社会的役割—フッサラのアントニヌス事件から—  | 15 |
| 10:00 - 10:40 南雲 泰輔（京都大学・院）                     |    |
| 後期ローマ帝国における『蛮族』と皇帝家—スティリコ・セレナ・ホノリウス—            | 16 |
| 10:50 - 11:30 貝原 哲生（大阪市立大学・院）                   |    |
| 6世紀エジプトにおける単性論派教会分離運動                           | 17 |
| 11:30 - 12:10 Peter Coss (Cardiff University)   |    |
| Gentry Life in Early Fourteenth-Century England | 18 |

**D 中世史部会 I < 34号館 215 教室 > (9:20 - 12:10)**

9:20 - 10:00 山本 成生 (東京大学・研究員)  
musicus 考—西洋中世における『音楽家』の表象と実態— 19  
10:00 - 10:40 奥村 優子 (早稲田大学・兼)  
初期中世ヴェストファーレンにおける聖界領主所領空間の形成  
—ヴェルデン修道院領を事例として— 20  
10:50 - 11:30 佐伯 綾那 (大阪市立大学・院)  
アンナ・コムネナの執筆活動—『アレクシオス 1 世伝』の情報源と想定読者— 21  
11:30 - 12:10 荒木 洋育 (武蔵野学院大学・兼)  
リチャード 1 世期(1189-99 年)イングランドの政治過程と行政長官職 22

**E 中世史部会 II < 34号館 313 教室 > (9:20 - 12:10)**

9:20 - 10:00 北島 寛之 (上野学園大学)  
ライン三大司教の首座争い 23  
10:00 - 10:40 村上 司樹 (大阪市立大学・研究員)  
11 世紀カタルーニャの教会と社会—ジローナにおける教会改革・遺言文書・都市— 24  
10:50 - 11:30 大浜 聖香子 (九州大学・院)  
12-13 世紀における北フランス中規模領邦とコミュニーポンテュー伯領を素材に— 25  
11:30 - 12:10 青野 公彦 (早稲田大学高等学院)  
15 世紀の教会改革—コンスタンツ・バーゼル両公会議の比較を通して— 26

**F 近世・近代史部会 I < 32号館 400 番教室 > (9:20 - 12:10)**

9:20 - 10:00 猪刈 由紀 (上智大学・兼)  
18 世紀ケルンへの遠距離巡礼と市営巡礼宿舎 27  
10:00 - 10:40 杉本 宗子 (神戸大学・院)  
フランス第二帝政における海軍改革—クリミア戦争での経験を通じて— 28  
10:50 - 11:30 高田 浩介 (別府大学・兼)  
民兵から国民衛兵へ—革命初期モンプリエにおける国民衛兵隊員の分析から— 29  
11:30 - 12:10 赤松 淳子 (ロンドン大学・兼)  
18 世紀イングランドにおける『夫婦間暴力』—離婚訴訟の記録から— 30

**G 近世・近代史部会 II < 32号館 500 番教室 > (9:20 - 12:10)**

9:20 - 10:00 西 圭介 (同志社大学)  
世紀転換期ドイツにおける自転車の普及と都市化—ビーレフェルトを事例として— 31  
10:00 - 10:40 東出 加奈子 (奈良女子大学・院)  
19 世紀前半におけるセーヌ河流域の運河建設—『海の港パリ “Paris Port de Mer”』へ— 32  
10:50 - 11:30 中野 智世 (京都産業大学)  
慈善と医学のあいだで—20 世紀初頭ドイツにおける肢体不自由児保護事業— 33  
11:30 - 12:10 馬場 わかな (東京外国語大学・院)  
近代家族と地域的紐帯  
—世紀転換期ハンブルクにおける在宅看護・家事援助協会を事例として— 34

**H 現代史部会 I < 34号館 314 教室 > (9:20 - 12:10)**

9:20 - 10:00 津田 博司 (京都大学・研究員)  
カナダにおける脱植民地化と 1964 年『大國旗論争』 35  
10:00 - 10:40 田中 晶子 (京都市立芸術大学・兼)  
西ドイツ APO 期の『対抗的公共圏』の展開  
—ハンブルク地域の反シュブリング・キャンペーンを中心に— 36  
10:50 - 11:30 金田 敏昌 (慶応義塾大学)  
連合軍占領期におけるドイツ警察の『現場』—ゲルゼンキルヒェン市の事例— 37  
11:30 - 12:10 Frédéric Rousseau (l'Université de Montpellier)  
La vie des combattants de la Grande Guerre. Questions et controverse historiographique. 38

**I 現代史部会 II < 34号館 315 教室 > (9:20 - 12:10)**

9:20 - 10:00 森本 慶太 (大阪大学・院)  
1930 年代スイスにおける『ソーシャル・ツーリズム』の形成  
—スイス旅行公庫協同組合とツーリズムの転換— 39  
10:00 - 10:40 藤田 怜史 (明治大学・院)  
アメリカ歴史教科書における第二次世界大戦—冷戦初期—原爆投下決定の記述を中心に— 40  
10:50 - 11:30 末次 圭介 (東京大学・院)  
第二次世界大戦中のアルザスにおける自治主義者の『対独協力』と『抵抗活動』  
—ジョゼフ・ロッセを例として— 41  
11:30 - 12:10 田崎 直美 (お茶の水女子大学・研究員)  
パリ市の音楽政策にみられる『創られた伝統』—第三共和政時代から第四共和政時代までの  
『パリ市音楽コンクール』(1876-1950)の制度の考察より— 42

**《小シンポジウム 13:10 - 16:30》**

**小シンポジウム I 変動する古代地中海世界のコミュニティ  
< 37号館 4F メディアホール >**

問題提起: 周藤 芳幸 (名古屋大学)  
趣旨説明 44  
世界史としての西洋古代史研究—古典学と人類学のはざま—  
基調報告: John Bintliff (Leiden University)  
The Greek City State and the Corporate Community: Can We Learn from Social Darwinism?.. 45  
コメント報告: 長谷川 岳男 (鎌倉女子大学)  
エトノス・シュノイキスモス・ポリス—ギリシア人コミュニティのダイナミズム— 46

**小シンポジウム II 大航海時代における東アジア世界の交流—日本をめぐる銀と鉛等の金属交易  
を中心に— < 3号館ホール >**

趣旨説明 48  
1. 飯沼 賢司 (別府大学)  
大航海時代における日本への鉛流入の意義 49  
2. 平尾 良光 (別府大学)  
鉛同位体比から見た日本の中世戦国時代における南蛮船で運ばれた鉛材料 50  
3. 村井 章介 (東京大学)  
銀と鉄砲とキリスト教 51  
4. 岡 美穂子 (東京大学)  
大航海時代のジェノヴァと日本—ポルトガル船への融資・投資事例分析を中心に— 52  
5. 仲野 義文 (石見銀山資料館)  
石見銀山の開発と東アジア—銀と鉛をめぐる— 53

## 小シンポジウム III ドイツ・フランス共通歴史教科書の射程

〈 32号館 500番教室 〉

|   |    |
|---|----|
| 趣旨説明.....   | 55 |
| 基調報告：ロルフ・ヴィッテンブローク（ザールラント大学）<br>パイロット・プロジェクトとしての独仏共通歴史教科書—教育モデルとしての移植可能性—... 56   |    |
| Rolf Wittenbrock (Universität des Saarlandes)<br>Das deutsch-französische Geschichtsbuch als didaktisches Pilotprojekt - Thesen zur<br>Transferierbarkeit eines Modells |    |
| 1. 松井 克行（大阪府立三島高校）<br>日本の高校現場からみた『独仏共通教科書』—現地調査を踏まえた活用実践報告—..... 57   |    |
| 2. 齋藤 一晴（明治大学・兼）<br>東アジアからみた『独仏共通教科書』—東アジア共通歴史教材制作の現場から—..... 58  |    |
| 3. 剣持 久木（静岡県立大学）<br>歴史認識共有の実験としての独仏共通教科書..... 59  |    |

## 小シンポジウム IV グローバル化とグローバル・ヒストリー：研究と教育の国際比較を中心に 〈 32号館 400番教室 〉

Symposium IV: Global History under Globalisation: Current Issues in Research and Education

趣旨説明..... 62

### 第1部 グローバル・ヒストリー教育と研究の現状と課題

Part I: Current Issues of Global History Education and Research in the Multinational World

講演：パトリック・マニング（ピッツバーグ大学）

グローバル・ヒストリーは国家の枠をどう超えるか—その教育・研究の現状と展望—... 63

Patrick Manning (University of Pittsburgh)

Teaching and Researching Global History in a World of Nations

### 第2部 ポストコロニアルな教室で歴史を教える／学ぶ—イギリスと日本の例を中心に—

Part II: Teaching Colonial and Postcolonial Reality in a Multinational Environment: The Cases of Japan and the United Kingdom

1. 藤田 加代子（立命館アジア太平洋大学）

『グローバル化』するアジア太平洋地域の大学とグローバル・ヒストリー教育..... 64

Fujita Kayoko (Ritsumeikan Asia Pacific University)

Teaching Histories of Globalisation in the Post-Colonial Asia Pacific Region

2. アナ・クレイドン（レスター大学）

コロニアル・ヒストリーとイギリス高等教育の現状—教育とカリキュラムへの歴史の影響に対する認識に関する調査結果から—..... 65

Anna Claydon (University of Leicester)

Perceptions of the Influence of the History in Current UK Higher Education Teaching and Curriculum

3. ピーター・マンテロ（立命館アジア太平洋大学）

不死なる現在—記憶なきグローバル化の時代に学生たちは歴史をどう捉えるか—..... 66

Peter Mantello (Ritsumeikan Asia Pacific University)

The Immortality of the Now: Teaching a Global History without Memory

4. 井口 由布（立命館アジア太平洋大学）

グローバル化とジェンダー研究・教育—教育実践を通じた西洋国民国家中心主義的ジェンダー論の問い直し—..... 67

Iguchi Yufu (Ritsumeikan Asia Pacific University)

Globalization and the Teaching of Gender Studies: Questioning the Western-nation-State Oriented Gender Studies through Educational Practices

# 大シンポジウム

5月29日(土) 13:30 -17:00 ビーコンプラザ フィルハーモニアホール

## 世界史教育の現状と課題

問題提起と提言：

鶴島博和（熊本大学）

世界史教育の現状と課題：高等学校から大学への一貫した歴史教育を求めて

### 第 I 部 高等学校における世界史教育

1. 吉嶺 茂樹（北海道札幌北高等学校）

高等学校における世界史教育の現状と課題—『学びの崩壊』と称される困難校で、『それでも世界史が好き』と言ってもらうために—

2. 西 裕一郎（大分県立森高等学校）

社会（歴史）事象を読み解く世界史授業実践

コメンテーター

児玉 康弘（新潟大学教育学部）

大塚 克彦（神戸夙川学院大学）

### 第 II 部 大学における歴史教育

1. 深沢 克己（東京大学大学院人文社会系研究科）

高校世界史と大学の歴史教育とを結ぶもの

2. 桃木 至朗（大阪大学大学院文学研究科）

歴史学と歴史教育の再生をめざして—阪大史学の挑戦—

コメンテーター

南塚 信吾（法政大学 / 世界史研究所所長）

田村 憲美（別府大学）

司会者：鶴島博和（熊本大学）

## 問題提起 世界史教育の現状と課題

鶴島 博和

わたしが研究を始めた70年代、「日本人には日本人の西洋史がある」といわれた。「日本人にとって西洋史研究」とは、いわば一種の「日本学としての西洋史」であった。また西洋史の教育が、大学院における研究者養成を目的としており、内容もカリキュラムとして構築されたというよりは、徒弟制的な態度育成であった。大学において、歴史学教授の方法論は欠如していたのである。マルクスやウェーバーを読むことがそく歴史学方法論であった。

それから一世代以上たって、若い学生諸氏が欧米の大学に留学すること、国際学会で報告をすること、あるいは欧文で論文を執筆することは珍しいことではなくなってきた。「日本人にとって西洋史研究」は、個人の内面の問題へ昇華し、かつて言われた「むこうの人と同じように研究することは不可能である」という「学問的関税障壁」は消滅してしまっただけのように見える。

しかし、歴史を「日本史」、「東洋史」、「西洋史」の三領域に区分して、大学の講座や学会を構成する伝統は、依然として堅固である。さすがに、イギリス史、フランス史、ドイツ史といった「国民国家史」の限界と問題性に関しては議論が積み重ねられてきたが、それでも一国的な叙述の著作が主流をなしている。じつは、日本にはこの第二の「学問的関税障壁」を乗り越える、「国民的」な文化的契機が存在するのである。高等学校の世界史という教科である。当初は、バラクロが指摘したように「国民国家史の束」という側面があったが、最近の教科書はさまざまな制約があるにもかかわらず、よくできている。印刷技術の進歩もあって、フラカラーの図版や地図がふんだんに盛り込まれた上質紙の美しい仕上がりで、構成も文明世界に基盤をおいて、世界史システムを意識したそれなりの仕上がりになっている。

問題は、高校と大学の教授体系が、歴史認識を育てるための方向性を見失っていることにある。高校のカリキュラムと大学のそれとの間には常に大きな溝があったしいまもある。しかし、かつて存在した学生の側のこの溝を乗り越えていこうとする意欲は消えうせたように思われる。いま、高校の世界史教育と大学の歴史教育の間の溝を埋めることが緊急の課題であろう。さらにその彼方に、受験の科目としての「世界史」となりえ、かつ研究の基礎となり、そして市民の学となりうる歴史教育を模索しなくてはならないのではないだろうか。そのために、まず高校と大学における「世界史教育の現状とあり方」を考えることから始めたいと思う。「世界史離れ」といわれる。数字的にはさほどではない。しかし、その底流で数字には表れない「離れ」ではすまない深刻な事態が進行している。世界史を、受験における選別のための教科から解き放ち、歴史認識を育成するための教科へと舵をきるためにはどうしたらよいのだろうか。

## 高等学校における世界史教育の現状と課題

—「学びの崩壊」と称される困難校で、「それでも世界史が好き」と言ってもらうために—

吉嶺 茂樹

日本の世界史教育は60年の歴史を持ち、近現代史を中心に扱う世界史Aが1989年に設定されてすでに20年がたつ。しかし世界史Aは「鬼っ子」とされ、「病んでいる」とされる世界史Bよりも、高校生全員への唯一の必修教科であるが故に、教科書採択数は多いにも関わらず、特に進学校の現場では全く受け入れられていない。この原因を受験教科に帰することは簡単であるが、問題はそう単純ではない。この問題は全国の世界史を教えている教員の「意識」の問題に大きく関わっていると筆者は考えている。

「世界史未履修」問題は記憶に新しいが、この問題を経ても、相変わらず現場では「世界史」という「受験科目」は嫌われ続けている。その最大の原因は、他教科に比べて圧倒的に分量が多すぎて覚えられないから点数を取るのが難しいということである。そしてそれは多くの他教科の教員たちに共有されており、(彼らも高校時代にそうであったが故に)自分の担任する生徒に対して積極的に世界史を勧めていない。そしてその傾向は、若い教員たちに拡大再生産され続けている。世界史Bの用語が増え続け、教科書が厚くなり続けているからである。

では、そもそも世界史の高校教員養成はどのように行われ、それが現場にどういった問題を投げかけているのか。さらに、今後の教員養成を考える上で重要な改革とされている「6年制」構想には、現時点でどのような問題が考えられるのか。論点は多岐にわたり、課題は山積しているが、それにも関わらず筆者は、毎日の授業を行う中で「世界史が好きな生徒は多い」と確信している。それを受験者増へつなげ、さらに大学での学びにつなげるためにどういう方策があるのか。今回の報告では、高校の現場で教えながら大学で教職課程を担当している者として、以上のような問題を考えてみたい。

## 社会（歴史）事象を読み解く世界史授業実践

西 裕一郎

高校世界史教育を取り巻く諸課題は、「未履修問題」によって世間の耳目を集める以前から、高校現場では暗黙のうちに共有されるアポリアであった。生徒の世界史離れ、世界史必修化とそれに伴う「世界史A」の登場、中学校社会科における世界史的内容の減少、またいわゆる進学校にて顕著に見られる受験偏重の単位数割振り。取り巻く環境の変化に翻弄される最中、「未履修問題」が追い討ちをかける。もはや自らの力によって立ち上がることが困難なほどに打ちのめされた高校世界史に対して、大学の歴史学研究の立場から積極的な提案がなされるようになった。大阪大学歴史教育研究会や九州大学歴史学・歴史教育セミナーなどの試みである。これらの研究会においては、歴史学研究者による最新の歴史学研究の成果が提示され、また高校教員による授業実践や高校現場の実態が報告されるなど、歴史学（大学）と歴史教育（高校）とのあるべき連携が模索されている。しかし、一般にこのような研究会において看過されがちなのが、歴史教育の目的そのものをどのように捉えるべきかという視点である。その点において、大学における歴史学研究と、学校教育活動全体の中に位置づけられるべき歴史教育とは明確に区別されなくてはならない。少なくとも高校世界史教育に携わる我々にとって必要なのは、自らの授業実践が目目の前の生徒たちにとってどのような意味を持つのか、という問題意識である。

歴史教育の目的をめぐる諸問題については、これまでもさまざまに議論されてきた。例えば、原田智仁は歴史教育を目的の観点から、①歴史学教育としての歴史教育（歴史目的型）、②公民教育としての歴史教育（歴史手段・価値注入型）、③社会認識教育としての歴史教育（歴史手段・人間形成型）の3つに類型化している〔原田：2000〕。このうち、「③社会認識教育としての歴史教育」として試みられてきたのが、科学的知識を科学的探究の方法によって習得させることを目的とした、概念探求型の授業である〔森分：1978〕。

本報告では、この概念探求型授業構成論に学びつつ、「社会（歴史）事象を読み解く」力の育成を意識した2つの世界史授業（「中世ヨーロッパの自然観」・「アメリカ独立革命」）の実践報告を通して、高校世界史で何ができるのか（あるいは何をすべきなのか）、それを実現するためにどのような方策が有効なのか、について検討したい。

## 高校世界史と大学の歴史教育とを結ぶもの

深沢 克己

大学で研究・教育される歴史学、とくに日本史を除外した東洋史・西洋史は、近年その入口と出口の双方で存立基盤を脅かされているように見える。すなわち出口では、文系諸学部における予算と人員の系統的削減があり、また大学の組織再編のなかで歴史系のポストが消滅する傾向にある。そして入口では、例の高校世界史「未履修問題」が浮上し、そこから世界史不要論が高まるのではないかと、という懸念が広まった。2007年以降、世界史教育を論じた著作が、大学教員によりつぎつぎに執筆された事実は、未履修問題のもたらした危機意識の大きさを証言していると考えてよい。

外部から見れば、このような動向自体を、既存の学問分野に執着する自己保身的姿勢として批判することもできるが、しかし研究・教育をになう大学教員が、中等教育との連携・協力の欠如について、さらに歴史学の「制度疲労」の危険性について、反省する機会をあたえられたのは重要である。わたくしに理解できた範囲で、世界史教育をめぐるこの間の議論を整理すると、そこには大別して二つの問題が論じられている。その第一は世界史をいかに記述するか、という歴史記述法の問題であり、そこには高校教育（世界史）と大学教育（東洋史・西洋史）との制度的非対称、ヨーロッパ中心史観とその批判、専門教育・研究における国民史的枠組みの牢固たる持続性、政治史中心の記述と社会史・日常生活史の導入、などの論点が含まれる。第二は歴史をいかに学ばせるか、どうすれば生徒の心に歴史への内発的関心と呼びさますことができるか、という歴史教育法の問題であり、「暗記物」という固定観念をどう克服するか、大学入試問題の質をいかに改善させるか、歴史を説明し解釈する作業を生徒にどう学ばせるか、そのために有力な理論や学説を教えるべきか、などの論点が認識論的反省とともに呈示されている。

これら二つの問題は、もちろん相互に関連するが、原理的には区別するのが適当である。またそれらはいずれも高校教育と大学教育とに一貫する根本問題であり、そこに量的な差異はあっても質的な断絶はない。第二の問題は一見して中等教育の技術的次元に属するよう思われるが、そこには人類がその過去と向きあう姿勢、歴史研究の内面的根拠という本質的な問いが潜在する。それゆえ教育と研究、教養課程と専門課程、中等教育と高等教育などの形式的二分法を超えて問題を考察し、高校世界史の問題性が、大学における歴史研究の問題性を反映していないかどうか、熟慮する必要がある。本報告では、このような視点から両者の関係を反省し、フランスの歴史教育の実情をも参照しながら、今後の歴史教育のありかたについて、できるだけ具体的に考えてみたい。

歴史学と歴史教育の再生をめざして  
—阪大史学の挑戦—

桃木至朗

現在の歴史教育の危機の原因としては、政府・社会や初中等教育・受験界の問題も大きいですが、教科書執筆、入試の出題、教員養成、教養教育などを担う大学側の責任も見逃すことはできない。「受験に必要な用語」が世界史教育 60 年で 2 倍に増殖し世界史からの集団逃亡を引き起こしている事態は、受験界の要求だけでなく、自分の研究分野の利害しか考えない大多数の研究者・大学教員が、よってたかって教科書を分厚くし、細かい入試問題を出題してきたことによる（しかもそれらには、不適切な記述や間違った出題が大量に含まれている）。その一方で、現にアンバランスな知識しかもたない大学生が大量に入学してくるのに、「低学力」を嘆くばかりで理系のように体系的な補習教育をしようという声が広がらないのは、大学側の怠慢としかいいようがない。だれも大局を見て全体を統括し、不要になった古い内容をスクラップすることができない構造のもとで、学習者がスポイルされ教育界が疲弊してゆく状況は、公共事業がふくれあがって国家財政を破綻させたさまと酷似している。

問題の根底にあるのは、職人的な「専門性」と「実証研究」のみに価値を置き、19 世紀的な西洋思想史ではなく全世界をカバーした「本当の史学概論」はどこにも存在しないような、研究・研究者養成のありかたである。そこから必然的に生じる、「歴史学の全体動向に位置づけられたかたちで」「専門外の読者・聴衆にも分かる言葉で」自分の研究成果を説明する能力の欠如は、「官僚」や「理系中心の大学当局」などに向き合う力量の低下という別の深刻な問題にも明白につながっている。「史学科」のしくみや働き方を変えなければ、緻密さと全世界をカバーする幅広さの点で「世界一」である日本歴史学界の実力は生きない。本報告の主題は、そうした問題意識から取り組まれている大阪大学史学系の一連の改革の取組を、高大連携から教養・学部教育、大学院教育、先端研究まで一貫した総体として紹介することにある。あえて東洋史学中心に紹介するのは、実際の取組もさることながら、「アジア軽視」と「東洋史学の非力」の悪循環を断つことが、歴史学と歴史教育の現代的意義の回復に不可欠な課題であることによる。

## 自由論題報告

5月30日(日) 9:20 - 12:10 別府大学 別府キャンパス

|   |             |               |                 |
|---|-------------|---------------|-----------------|
| A | 古代史部会 I     | 34 号館 115 教室  | (10:00 - 12:10) |
| B | 古代史部会 II    | 34 号館 213 教室  | (9:20 - 12:10)  |
| C | 古代・中世史部会    | 34 号館 214 教室  | (9:20 - 12:10)  |
| D | 中世史部会 I     | 34 号館 215 教室  | (9:20 - 12:10)  |
| E | 中世史部会 II    | 34 号館 313 教室  | (9:20 - 12:10)  |
| F | 近世・近代史部会 I  | 32 号館 400 番教室 | (9:20 - 12:10)  |
| G | 近世・近代史部会 II | 32 号館 500 番教室 | (9:20 - 12:10)  |
| H | 現代史部会 I     | 34 号館 314 教室  | (9:20 - 12:10)  |
| I | 現代史部会 II    | 34 号館 315 教室  | (9:20 - 12:10)  |



帝政ローマ前期ガリアにおける商人と地方貴族の紐帯  
—河川水運業者組合『外部』パトローヌスの検討を中心に—

長谷川 敬

本報告では後2世紀帝政ローマ治下ガリアにおける商人層に着目し、彼らが他の社会集団との間に構築していた人的関係を明らかにすることでガリア社会の一側面を詳らかにしつつ、帝政前期ローマ社会における通説的な商人・貴族関係の再検討を試みる。2008年発表の論文（『史学雑誌』117-10、1-36頁）において、報告者はリヨン在住の河川水運業者組合とそのパトローヌスの関係に焦点を当て、組合外から招聘された一部のパトローヌス（「外部」パトローヌス）をローマ組合研究における通説的なパトローヌスと同種のもの、即ち彼らはその名声と財力がゆえに組合によって選任されたと考え、詳細な検討を加えなかった。本報告はこの「外部」パトローヌスの性格と選任背景に関する再検討をその中心的な作業に位置づけている。先行研究では、「外部」パトローヌスの出身地と河川水運業との地理的関連性から両者の経済的な結びつきが示唆されているが、その論拠は不確かなままである。それ故関連する碑文史料をあらためて検証した結果、「外部」パトローヌスの多くがリヨン近郊コンダテでのガリア三属州による皇帝礼拝の財務関連の役職に就任していたことが確認される一方で、名望や資力の面でこれら財務職を凌いでいたとみられる皇帝礼拝祭司の就任例は一例も確認されなかった。したがって、在リヨン河川水運業者組合の「外部」パトローヌスは、名望・資力の点では見劣りするものの、財務会計に関する豊かな専門知識と実務経験を備えていたと考えられるが、その知識・経験獲得の機会を裏付けるものとして、彼らがガリアの地方貴族上層に属しつつも所領経営や商業活動に直接関与していたことが史料的にも示唆されている。したがって、これら地方貴族が、組合パトローヌス選任の主要条件とされる名望と財力の面で劣るのにもかかわらず選任された背景として、従来パトローヌスの重要責務と見做されてきた特権確保と金銭施与とは必ずしも一致しない両者の商業活動上の何らかの連携が存在した可能性が指摘できるだろう。

古代ローマにおける墓碑の改変

福山 佑子

古代ローマでは、死後にメモリアを残すことは名誉であると認識されており、墓碑やモニュメントは重要な自己表現の手段として用いられていた。なかでも墓碑は、その家の由緒や功績を公に示し、後世へと伝える媒体であったため、極めて大きな意味を持っていた。そのため、皇帝や元老院議員から解放奴隷に至るまで、広い社会階層の人々が競い合うように墓碑を建てたのである。

しかし同時に、ローマ世界では碑文の改変も行われていた。特に有名なのが、元老院によって「国家の敵」と判断された、皇帝や元老院議員などの高位の人物に対する死後の処罰として知られる、ダムナティオ・メモリアエ（*Damnatio Memoriae*）における事例である。これは碑文から氏名を削除するのみならず、彫像の破壊や服喪の禁止などを通じて、当該人物が生前に作り上げたメモリアを破壊するものであり、近年、研究者の注目を集めている題材である。しかしながら、ダムナティオ・メモリアエの政治的側面が重視されるあまり、碑文の改変についての研究も、その対象が上記のような高位の人物に限定される傾向にあった。だが、このような碑文の改変は、その他のローマ市民や解放奴隷の事例でも確認することができるものであり、階層を問わず、幅広く行われていたのである。

このような状況を踏まえ、本報告では、これまでの研究で看過されてきた、広くローマ世界に生きた人々の墓碑を考察の対象として取り上げていく。これらの事例の多くは、死別・再婚・離婚といった家族構成の変化によって私的に改変されたものであり、元老院の意向とは関係ないものであったことを考慮すると、政治的意図を超えた、当時のローマ人の墓碑改変に対する意識や、その社会的意味合いを把握するには有益である。そこで、墓碑の改変によって抹消された人物の分析や、墓碑の改変が行われた動機の解明を通じて、それらを探るのが本報告の課題である。また、このような墓碑の改変の背景にあるローマ人の家族観についても、併せて考察を行いたい。

## 三人委員統治前期における『故ユリウス・カエサル』利用の一側面

- Sex. ポンペイウスによる故ポンペイウスと海神ネプトゥヌスの利用を手  
かがりに-

山本 興一郎

前44年3月15日、独裁官ユリウス・カエサルが暗殺された。暗殺後のカエサルについて、前42年のカエサル神格化確定（この神格化は生前のカエサルの行為を肯定し、暗殺者たちとの対決時に象徴としても利用された。）後は、直接死後のカエサルを扱った研究は多くはみられない。報告者が関心をもっている暗殺後の表象としてのカエサル（便宜上「故ユリウス・カエサル」と呼ぶこととする。）に関しては、関連した重要な研究「皇帝礼拝」などでも扱われるのは、多くはカエサルの生前の活動と彼の暗殺、そして前述の神格化確定・暗殺者打倒までである。その後はアウグストゥスの神聖化の文脈や、新しい時代の象徴の一つとしてしか言及されず、研究者の関心は他の諸神利用やアウグストゥスの宗教政策に移ってしまう。

だが報告者はローマ帝政成立に影響を与えたカエサルの暗殺後についても、その存在が後継候補者たちにどのような影響を与えたのかを検討する必要があると考えている。そのためオクタウィアヌスによる「故ユリウス・カエサル」利用を中心としながら、「故ユリウス・カエサル」利用を各時期・出来事ごとに利用者とそれを受ける側の反応も含めて、どのような特徴・傾向をもっていたのかを検討している。

本報告では上記検討の一環として、Sex. ポンペイウスの活動と「故ユリウス・カエサル」利用の關係に注目する。カエサル暗殺以後の混乱期から前36年の敗北に至るまでの間、Sex. ポンペイウスは主にシチリア島を拠点に勢力を保ち、オクタウィアヌスにとって大きな脅威であった。彼は父である故ポンペイウス・マグヌス、そして父の偉業と自身の権力基盤である海軍との関連から、海神ネプトゥヌスをも利用している。このSex. ポンペイウスによる父と海神の利用はオクタウィアヌスとは立場は違うが、敵対者に対抗するために行われた点、息子によって利用された点、神に準える点など、一見するとオクタウィアヌスによる「故ユリウス・カエサル」の利用の仕方と共通点があるようにも見える。そこでSex. ポンペイウスによる利用を検討し、その特徴を明らかにすることで、彼と対立するオクタウィアヌスらによって利用されたこの時期の表象「故ユリウス・カエサル」の利用の特徴をも見出したいと考えている。

## 前360年代のトラキアにおけるアテナイ人イピクラテスの活動

小河 浩

アテナイ人イピクラテスは前四世紀前半のアテナイにおいて最も有能な軍事指導者としてしばしば将軍に選出されると同時に、政界の中心にもいた人物であった。彼は時に国外で傭兵隊長として活動したといわれるが、特に前三六〇年代にはトラキアのオドリュサイ人の王コテュスのもとでアテナイの将軍たちと交戦したことを伝えられる。この時のイピクラテスの活動内容に関しては主要史料のデモステネス第二三番「アリストクラテス弾劾」が難解なことによって明らかでない。加えて前三六〇年代のエーゲ海北部をめぐる政治・軍事情勢が複雑なことにもより、同時代史料にもあいまいな点や矛盾する部分が多いことも問題を一層解明困難なものとしている。

イピクラテスの活動内容についても程度の差こそあれ、彼がコテュスの傭兵隊長としてアテナイを裏切ったとされる一方で、それとは逆に公務でアテナイを代表してトラキアに滞在していたとする見方もある。またトラキアにおける彼の活動はアテナイのため功績を立てて帰国するためのものだが、アテナイの混乱する政局のなかで合法的にアテナイの将軍と交戦したとする説もある

問題の複雑さから、本論ではまず諸説を再検討して最も可能性の高い道筋をたどっていくように努める。特にイピクラテスがコテュスのもとで実際にアテナイ人と戦ったかどうかについては、アテナイにおける政治グループの視点から分析することが有効と考えられる。当時のアテナイでは弁論家と将軍が結びついて複数の政治グループを構成し、政治の主導権を争っていた。イピクラテスもその例にもれず、政治グループの一員だったからである。以上のような方法で、本論では前三六〇年代前半におけるトラキアにおいて、イピクラテスがいかなる活動を行ったのかを明らかにする。同時に、古代ギリシア人にとって傭兵活動がいかなるものであったのかをうかがうことも目的としている。

## 東地中海地方都市ティール出土碑文資料における字形の変化

## - 碑文非文字情報研究の成果と展望 -

奥山 広規

本報告では、東地中海地域の地方都市ティール(古代名:テュロス、テュルスなど)から出土した碑文(主に帝政期~古代末期)に記されている文字の字形の検討を通じて、テキスト内容のみならず、碑文の非文字情報に目を向けることを目的としている。報告者は、レバノン共和国ティールの調査隊に2003年以来参加しており、本報告では、その際に行った現地調査成果が柱となっている。

碑文は、記されている内容を分析することで過去の再構成を導く重要な歴史史料の一つである。とりわけ、研究材料となる詳細な史料が少ない地方都市研究の要といえるだろう。近年、この碑文に対する認識が変化し、欧米を発信源に日本でも注目され始めている。それは碑文を単なるテキスト(文字情報)としてのみ捉えるのではなく、その碑文が記されている素材、碑文の設置された場所(非文字情報)など、碑文を取り巻く社会的コンテキストにも当てはめて碑文を検討するものである。

本報告では、碑文に記された文字の字形を分析する。字形の検討は、碑文学・古書体学では、基本的な作業であり、年代特定の重要な要素である。しかしながら、これまで字形の変化の認識の多くは、経験的で感覚的なものであった。字形から引き出せる情報を碑文研究に役立てるためにも、考古学的な編年を組み、体系的に検討することが必要であろう。加えて、碑文に彫られる文字の字形の変化は、都市(領域)ごとに多様なものであり、都市(領域)ごとの詳細な分析も必要である。例えば、ティールでは、ラテン語碑文とギリシア語碑文における字形の変化に違いがある。ギリシア語碑文と比べてラテン語碑文の字形の変化は明らかに少なく、それは、日常的にラテン語を用いないティールにおけるラテン語の機能と社会状況を反映していると考えられる。

碑文における字形の変化は、他の様々な資料と同様に歴史的な産物であり、ティールのコンテキストと深く結びついている。従って字形の変化の検討は、碑文の基礎的な研究であるだけでなく、ティール社会の一端をも垣間見せるだろう。

## 元首政初期レプキス・マグナの都市発展

## -前20年のガラマンテス遠征を通じて-

青木 真兵

前20年、ガデス出身のローマ人コルネリウス・バルブスはガラマンテス王国の都ガラマを征服した。バルブス率いるローマ軍が制圧した都ガラマとは、現在のリビア内陸部地域フェザーンに位置する都市ジェルマのことである。この遠征はローマとガラマンテス間の交易を活発にし、主にアフリカ内陸部から金や象牙、奴隷などを地中海へ送り出したことに意義づけられてきた。また、ガラマ周辺から出土するローマの土器やコインといった考古学的資料がガラマンテス王国側にも富をもたらしたことを示している。そして、地理的にその中間に位置したのがレプキス・マグナであった。

現在のリビア西岸に位置した都市レプキス・マグナは、後193年ローマ皇帝に即位したセプティミウス・セウエルスを生み出し、後3世紀には属州アフリカでカルタゴに次ぐ大都市として発展した。そしてその発展の端緒は元首政初期にまで遡る。前8年に市場、後1/2年に劇場が、フェニキア系土着エリートによって建築されたのであった。

従来、元首政初期レプキスの発展を可能にした要因は主に二つ考えられてきた。一つはアウグストゥスによる地中海の政治・経済的統一。もう一つはレプキスの地理的な位置がローマによる支配の中心地から遠かったということである。つまりレプキスは、ローマによる支配・被支配といった直接の関わりが薄かったからこそ発展した都市として語られてきたのである。

本発表では、バルブスの遠征がレプキスの都市発展に対して有する意義について推測を交えながら検討することで、レプキスとローマとの関係について考察する。結果的にこの遠征は、レプキスとガラマンテス王国間の交易を活発にし、レプキスの都市発展を促したと考えられる。

ローマン・アフリカの文化とローカル・エリート  
 -トゥッガにおけるガビニウス家を中心に-

井福 剛

古代ローマ時代の北アフリカの研究ほど、明白に近代の帝国主義と重ねられて語られてきた対象はないだろう。近代以降のローマン・アフリカの研究はヨーロッパ帝国主義言説を色濃く反映してきたといえる。しかし、アフリカの国々が独立を迎えた1960年代以降、そうしたヨーロッパ中心の歴史観の読み替えが始まり、現在ではポストコロニアル理論の進展と相俟って、ヨーロッパ中心主義批判の中心的な対象となっている。

本報告では以上のような研究動向を踏まえた上で、ローマン・アフリカにおいていかに文化が創造され、その創造過程が個別・具体的なコンテキストの中でのどのような意味を持っていたのかということについて分析を行う。そのために対象をトゥッガという北アフリカの一都市に絞り、さらにトゥッガの政治状況が大きく変化していた2世紀から3世紀前半にかけて公共建設を盛んに行っていたガビニウス家というローカル・エリートの家系に焦点をあて考察を行っていく。

もちろんこの事例だけでローマン・アフリカにおけるローカル・エリートと文化の関わりを語りつくすことは困難ではある。しかしながら、ローマの支配に入ってから以降、トゥッガにはカルタゴ・ヌミディア時代から続く市街地であるキウィタス (civitas) と、その南西に位置するカルタゴ植民市から移住してきたローマ人が居住するパグス (pagus) の二つのコミュニティが存在していたことから、この都市を考察することで両コミュニティが接触する中での文化の創造過程を具体的に示すことが可能だろう。

さらに、ガビニウス家がキウィタスから台頭し、ローマ市民権を得ることでパグスのメンバーになった新たなエリート層であったことが重要である。つまり、ガビニウス家は両コミュニティを横断するような新たなローカル・エリート層とみなすことが出来るのである。このような両コミュニティと関係するエリート層を考察することで、二つの文化が接触する中での文化とローカル・エリートの関わりの一側面を示し得るだろう。

本報告ではこうした事例を考察することで、トゥッガという場において行われていた「共通言語」を創出する試みの意義を見出していきたい。

5世紀前半の北アフリカの農村における正統派司教の社会的役割  
 -フッサラのアントニヌス事件から-

長谷川宜之

本報告の目的は、フッサラ (Fussala) 司教アントニヌスの処遇をめぐる一連の騒動を検討し、北アフリカの農村社会での正統派司教の役割を考えることである。

フッサラとは都市ヒッポの領内にあった集落 (castellum) である。411年ローマ帝国が正式にドナトゥス派を異端と宣言すると、北アフリカでは正統派への改宗が進んだ。フッサラでも住民たちが正統派に改宗した。そこで411年、アウグスティヌスはこの集落をヒッポ司教区から切り離し、独自の司教区とした。その最初の司教がアントニヌスである。このとき彼は20歳で修道院の読師 (lector) にすぎず、異例の大抜擢だった。

司教としてフッサラに赴任すると、アントニヌスは司教の権限を濫用し、住民たちにさまざまな悪事をはたらく。その結果422年、彼は住民たちによってアウグスティヌスの司教裁判 (episcopalis audientia) に訴えられた。しかし、アントニヌスはその裁きを不服とし、ヌミディア主席司教から渡航許可を得てローマ司教に上訴するという手段をとった。彼の訴えを聞き入れたローマ司教はこの問題を調査するためフッサラに使節を派遣した。この事件はローマ教会を巻き込む大事件に発展してしまった。

これまでも多くの研究者がこのアントニヌスの事件に関心を寄せている。このできごとは、おもに、アウグスティヌスによる司教裁判、ローマ司教とアフリカ教会の関係、農村部での司教の暴力を示す事例として、とりあげられてきた。1970年代になると、アウグスティヌスの書簡が発見され、これまで知られていなかった情報が得られるようになり、研究は一段と深化した。

しかし、これまでの研究はアントニヌスの非道ぶりが強調されるばかりで、そのころの農村社会のコンテキストに位置づけることにはあまり関心を寄せられてこなかったように思われる。当時の農村部でアントニヌスの悪行がどれほど突出したものだったのだろうか。本報告では、当時の北アフリカにおける農村の社会のなかでアントニヌスの事件をとらえ直し、農村部における正統派司教の役割を考えたい。

## 後期ローマ帝国における『蛮族』と皇帝家

-スティリコ・セレナ・ホノリウス-

南雲 泰輔

「ローマ文明は天寿を全うしたのではない。暗殺されたのである」とは、いうまでもなくフランスのローマ史家A. ピガニオルの著『キリスト教ローマ帝国』(A. Piganiol, *L' Empire chrétien (325-395)*, Paris, 1972. 初版1947年)の掉尾を飾った有名な文句である。ピガニオルにとってローマ暗殺の犯人は「蛮族」、すなわち4世紀後半以降のゲルマン民族の「大侵入」にはかならなかつたが、かかる見方は、いわゆるローマ帝国没落原因論の枠内では外因論として、諸々の批判を経た現在においても、なお根強く主張され続けていることは周知の通りである。他方、近時の学界においては、価値観と観点との多様化に伴い、エスニシティやアイデンティティに着目する研究が増加するとともに、伝統的な学説が設定した「ローマ」対「ゲルマン」なる「二項対立」が、理解として「安易」で「危険」だと指摘されるようになって久しい。

本報告は、後期ローマ帝国における「蛮族」、なかんずく帝国中枢に入り込んだ「蛮族」のあり方について、上述のごとき「蛮族」評価をめぐる一般的な学界の動向を踏まえた上で、当時の政治状況や帝国の統治構造との関連を含め考察し、それによって、東西分裂前後の時期においてローマ帝国がいかに変質したか、その一端を探るべく試みるものである。

具体的な考察対象は、ローマ帝国西部、ホノリウスの宮廷で権勢を誇った武官スティリコと皇帝家との関係である。スティリコは「蛮族」の出身で、キリスト教徒であり、しかも皇帝家と幾重にも姻戚関係を結ぶという、この時代を理解するための鍵たる諸要素が彼自身において交錯する、極めて個性的な人物であった。それゆえ、彼の事績は19世紀以来さまざまなレヴェルで論じられてきたが、なかんずく彼と皇帝家との間で形成された姻戚関係に関しては、当時の帝国社会の思潮としてしばしば指摘される「反ゲルマン人感情」の存在をも考慮するとき、帝国中枢における「蛮族」のあり方如何の考察にとって好適な論点となしうであろう。本報告では、特にスティリコをパトロンとした詩人クラウディウス・クラウディアヌスによるラテン詩の分析を中心に、如上の問題について検討を行ないたい。

## 6世紀エジプトにおける単性論派教会分離運動

貝原 哲生

6世紀半ば以降のシリアにおけるヤコブ派やエジプトのコプト派、すなわち分派教会の成立は、451年のカルケドン公会議以来深刻化の一途をたどったカルケドン派と単性論派との宗教的対立の頂点であるとともに、エジプトやシリアのナショナリズムが結晶化したものである、とかつては位置づけられていた。しかし昨今では単性論派の教会分離運動とナショナリズムとを結びつける見解は否定されている。では教会分離運動とはいったい何だったのか、その歴史的意義は見直されなければならない。教会分離運動にまつわる議論において強調されるのは、親ビザンツ的で都市に勢力を張るカルケドン派教会と反ビザンツ的で農村部を拠点とする単性論派分派教会との二項対立である。後者のかくの如きあり方は、第一にユスティニアヌス1世が異端派主教に対し都市への立入を禁じたことに起因するが、それだけではなく、単性論派主教が修道士としての生活に忠実たらんとして、自発的に都市郊外の修道院に居を構えたからでもあった。

シリアではこの構図が当てはまるかもしれない。国境地帯であり、財政不足の帝国に代わり農村部の防衛を請け負ったのが修道院だったことから、双方の結びつきは緊密であった。加えて、シリアにおける教会分離運動の担い手が思考の上で帝国に固執することのない新世代の修道士だったことにより、この地の分派教会はビザンツ世界からの逸脱も厭わない反帝國的な性格を帯びたと言えるだろう。

しかし、エジプトには必ずしもこの構図は該当しない。強力な外敵が不在で、修道院と農村にシリアほどの繋がりがなかった。また、この地において分派教会が誕生した570年代、カルケドン派のアレクサンドリア総主教は単性論派に対して穏健な態度で臨んでおり、双方の関係は良好であった。むしろ彼らにとって分派教会の創設は、いち早く教会組織の構築を達成したシリアの分派教会がエジプトの単性論派をもその管轄下に組み込まんとしたことへの対抗措置であった。

それゆえ、強固なイデオロギーを持ち合わせていなかったエジプトの分派教会は指導者たる総主教の座をアレクサンドリアの在地名望家一族が握るようになると、都市志向へと傾斜していく。そしてアレクサンドリアでは、教会分離運動が古くから続く中央政府と在地有力者層との都市自治をめぐる争いに収斂されていくのである。

## Gentry Life in Early Fourteenth-Century England

Peter Goss

This paper will examine how the gentry lived and sustained their lifestyle in early fourteenth-century England. It will give some indication of their level of material culture and it will look at how they organized their households and their estates. It will examine how they related to their servants and tenants, and all those who made their lifestyle possible. It will look at how they interacted with members of the local society of the areas where they held estates, with professionals (such as lawyers, administrators and merchants) and with the church. It will look at how they expressed their social status and how they exercised their power locally; by means of display (buildings, monuments and heraldry) for example. It will also look briefly at the influences upon the gentry from the world beyond, from chivalry and warfare, from the great lords and their retinue and from royal service as sheriffs, justices, commissioners and generally as agents of the state and partners in government. The paper will concentrate, however, on gentry life in and around their estates. It will see how they entertained themselves, both physically and mentally, when they were resident, and it will try to understand something of the attitudes and assumptions that governed their lives. This will be done by reference to the types of sources open to the historian. It will be argued that the period from the late thirteenth century to the middle of the fourteenth was crucial in conditioning the role and behaviour of the gentry over many centuries to come. In attempting to understand the lives of the gentry and the conditions which governed their lifestyle I will be making some comparisons and contrasts with the lives of those of similar status in Japan.

## musicus 考—西洋中世における『音楽家』の表象と実態—

山本 成生

西洋中世における「音楽家」のあり方を考える上で、musicus という語は、扱うのが難しい言葉である。なるほどそれは「音楽家」を意味する西洋諸語の語源たるラテン語ではあるが、今日において我々が使うような意味——音楽の作成や演奏に携わり、また何らかのかたちでそれを生業としていた者たち——で理解されていた訳ではなかったからである。この語はもっぱら中世の音楽理論書において用いられており、そこではボエティウスの「音楽教程」(De institutione musica) が大きな影響力を有していた。

ボエティウスは、著名なその音楽観と同様に「音楽に関わる者」を三つの種類に分類する。すなわち「楽器を弾く者」(演奏家)、「歌を作る者」(作曲家)、そして「楽曲や歌を判断する者」(音楽学者)である。だが前二者は、楽器や自然の欲求に従属しており、理性を備えていないという理由で「音楽から切り離された」存在とみなされる。むしろ、ここでいう「音楽」(musica) とは、作曲理論や演奏技法のことではなく、宇宙や身体、精神などの関係を「数の調和」から考察する一種の哲学的・数学的な行為、すなわち「思弁的音楽」(musica speculativa) のことを指していた。

9世紀における「グレゴリオ聖歌」の成立、そして盛期中世における「多声音楽」の誕生や世俗音楽の展開に伴い、音楽理論書の世界においても「実践的音楽」(musica practica) に関する記述が増加する。しかし、「音楽家」のあり方については、依然としてボエティウスの定義が考察の基礎に置かれていた。この報告ではまず、関連する唯一の先行研究であるE・ライマーの論文(1978)を手掛りに、中世の音楽理論家における musicus 概念の内実とその変遷を検討する。

複雑な多声音楽が開花し、音楽史上「ルネサンス」と称される15世紀になると、音楽思想にも少なからざる変化がみられる。そのありようを多角的に論じるのが、本報告の第二の内容である。ここでは、ティンクトーリスを始めとした当時の代表的な音楽理論家の著述のみならず、「音楽家」に関する文学的・美術的な表象、そして音楽の担い手自身のあり方が検討される。この報告が、中世・ルネサンスにおける音楽家、ひいては知識人に関する我々の理解の一助となれば幸いである。

初期中世ヴェストファーレンにおける聖界領主所領空間の形成  
-ヴェルデン修道院領を事例として-

奥村 優子

ヴェルデン修道院は、初期中世において、ライン河口地域からフリーセン地方東部、ヴェストファーレンにかけて所領を展開させてきた。当修道院の所領全体を概観すると、一見、1つの修道院所領という一体性を持った空間は形成されていないように思われる。しかし、これらの地方に散在する所領群毎に、個別に詳細な検討を試みるならば、なんらかの要素によって1つのまとまった空間が形成されている様子が浮かび上がってくる。この要素とは何であるのか。本報告では修道院に伝来する土地台帳 (Die Urbare)、国王から受給した特権付与文書を主な手がかりとして、ルール地方東部およびヴェストファーレン北東部での所領展開について、とりわけ宗教的側面、つまりこの地方におけるキリスト教化の完成と信仰の強化という動きとの関連に焦点を当てる。また、ヴェルデン修道院の所領は、カロリング期から流通活動との関わりが指摘されてきた。こうした動きの、この地方での商業や市場と地域空間の形成への影響、さらにこの地方での宗教的展開との関わりの可能性を探る。

アンナ・コムネナの執筆活動  
-『アレクシオス1世伝』の情報源と想定読者-

佐伯 綾那

本報告において、ビザンツ皇女アンナ・コムネナ(1083-1153/54)による『アレクシオス1世伝』の執筆活動に関して、今回は彼女の著作に限って分析・検討していく。

アンナは、追放先のケカリトメネ修道院にて、1148年頃から『アレクシオス1世伝』の執筆を開始し、1153-54年頃に亡くなる直前まで著作に筆を入れていた。彼女のテキスト分析については、かなりの研究蓄積があり、中でも2001年出版のギリシア語版テキストに詳細な史料解題がなされている。全15巻からなるその著作の大部分を占めるのは、アンナの父アレクシオス1世コムネノス(位1081-1118年)の功績に対する称賛である。しかしながらそれだけでない。アンナは自らの執筆活動や心情についても語っており、そのような描写は一人の女性の内面に迫るてがかりとなりうる。

今回は、『アレクシオス1世伝』から読み取れるアンナの「声」の中でも、自らの行動や内面について語った記事に注目し、次の2つの面から考察を試みる。

最初に、アンナは執筆に際して、どのようにして情報を集めたのか。彼女は、自身の父アレクシオス1世をはじめとする親族や、退役兵から話を聞くことで情報収集したことを著作内で語っている。しかし、調査の開始時期やそして、彼女を取り巻く調査及び執筆当時の状況を鑑みた場合、それらの叙述と矛盾する点が見られる。

次に、アンナは何を誰に伝えたかったのか。彼女が「伝えたかったこと」については、テキスト分析からいくつか推測することはできる。それでは、そのいくつか存在する「伝えたかったこと」は「誰に」向けられたメッセージであったのか。

以上の2点を、調査の開始時期から執筆時期にかけての社会とアンナ周辺の背景を踏まえつつ検討していく。以上のような考察は、後世の我々が史料として扱うこととなる書物の作成過程をみていく一つのケース・スタディーとなりうるであろう。

## リチャード1世期(1189-99年)イングランドの政治過程と行政長官職

荒木 洋育

イングランド行政長官職(chief justiciar)はノルマン・コンクエスト以降、イングランド王家が大陸側にも所領を保有することに伴い現れた官職であり、国王がイングランドを不在にする際にその「代理」として行政府を統括したとされる。最近では上記権能の最終的な確立をヘンリー2世(在位1154-89年)治世末の時点とする見解が有力ではあるが、次のリチャード1世期はヘンリー2世の体制を継承し、かつ王が在位期間中ほとんどイングランドを不在としたことから、結果としてヒューバーと・ウォルターが在職した期間(1193-98年)を中心として行政長官職の「頂点」となった時期とする見方が従来の研究では普通であった。

確かにリチャード1世がイングランド国内に滞在したのは1194年の一時期だけであり、その前後に二分される不在期間があるが、前半期の不在と後半期の不在とは性格が異なる。後半期の不在はカペー家との大陸所領関係の戦役によるもので、国王とイングランドとの関係を考えれば、ヘンリー2世の時の不在と条件面では同じである。しかし、前半期の不在は十字軍遠征への参加とその帰途におけるドイツでの捕囚によるもので、前者と比較して遠距離、かつ長期にわたることが当初から予想されるものであった。そのことを考慮すると両者の時期では行政長官職のあり方、国王の同職の扱い方には当然違いが生じるはずである。即ち従来の研究ではリチャード1世期の状況を代表するものとされてきたヒューバート・ウォルターが在職した時期は治世後半期の不在に相応し、ヘンリー2世期の延長として確かに解釈できるものの、前半期の不在に関してはそのような解釈はあてはまらないのではないだろうか。当時の王を含む政権首脳部は遠距離・長期間の不在が予想される状況に際し、ヘンリー2世治世末と異なる対応の必要性を認識していたとみられる。一例として即位当初においてリチャードは(一人ではなく)複数の行政長官を指名していることを指摘したい。以後、リチャードの帰国(1194年)に至るまで、王自身の指示や政変などによって様々な形の不在時統治体制が試みられることとなり、王の捕囚と皇帝による身代金請求、カペー家と呼応した王弟ジョンの軍事行動という厳しい状況への対処をすることとなった。

本報告ではこのリチャード1世治世前半の国王不在期に焦点を置き、記述史料、行政史料に基づき、上記政治過程をたどりつつ、各不在時統治体制の性格と其中での行政長官職の位置、およびその結果に関する考察を行う。

## ライン三大司教の首座争い

北島 寛之

ドイツ西部のライン地方に互いに隣接して大司教座を構えるケルン、マインツ、トリーアの三大司教は、中世ドイツの歴史において政治的・宗教的に指導的地位を占めたことで知られるが、10世紀から11世紀にかけて、ドイツ教会内における首位の座(prima sedes)をめぐるこれら三大司教の間で争いが起こった。この争いにおいて、各大司教は互いに他に対して優位に立つべく、位階において大司教(=首都大司教 metropolita)より上位に相当する地位を主張し、教皇の承認によってこれを獲得せんと競い合った。そしてその際、彼らは過去の伝統やローマ教会との歴史的つながりを持ち出し、伝説を創出して自らの首位的地位の正当性の論拠としたのである。

中世ヨーロッパにおいて、このような首位の座をめぐる争いは他の地域でも見られたが、しかしライン三大司教におけるほど長期にわたって争いが繰り広げられ、且つ伝説の創出が数多く行われた例は他にはなかった。しかもヨーロッパの他の首座争いとは異なり、ここでは国王聖別・戴冠権と結びついて争いが展開するという独自の現象が見られたのである。また時代的にも、ライン三大司教の争いは他地域には見られない特色を有していた。即ち、この時代はドイツにおいて教会が国家の統治機構の中に組み込まれて特殊な発展を遂げた時代、いわゆる「帝国教会制(Reichskirchensystem)」の時代に相応していたのである。そしてその中で帝国教会の頂点に立ち、最も高い地位を占めたのが、他ならぬケルン、マインツ、トリーアの三大司教だったのである。

このようにライン三大司教の争いは、単なる教階制度上の地位をめぐる問題にとどまらず、ライン地方における伝説の発展や、ドイツの国王戴冠権の歴史にとっても重要な意義を有している。また、帝国教会制下における司教相互間の関係の実態を考える上でも、1つの有益な視座を提供するであろうと思われる。さらに、この争いは当時の高位聖職者の過去に対する意識や自意識のあり方を窺い知る上でも好個の素材を与えてくれるものと考えられる。およそ以上の如き問題関心から、本報告においてライン三大司教の首座争いを取り上げ、10世紀から11世紀後半に至るまでの展開を考察することとした。



## 11 世紀カタルーニャの教会と社会

## —ジローナにおける教会改革・遺言文書・都市—

村上 司樹

司教や修道院長などの高位聖職を俗人が左右し、ときに金銭や保護をもって購ういわゆるシモニア（聖職売買）は、11 世紀以前の西ヨーロッパ世界に広く共通した現象である。にもかかわらずリチャード・ウィリアム・サザーンの古典的名著『中世の形成』の影響もあり、スペイン北東部カタルーニャ地方は、かかる腐敗の典型例というか不名誉なイメージを負わされることとなった。

しかし例えばクリュニーが、かつてのように修道院改革の普遍的モデルとしてではなく、在地の領主社会すなわち特定地域のコンテクストの中で理解され、またいわゆるグレゴリウス改革も、聖俗関係を矯正するどころか、逆に伝統的な相互関係や地域固有の秩序を破壊するだけであったとして、ともにその全西洋史的な意義を疑問視されるようになってから久しい。

さらに広く近年の学界状況を鑑みるに、そこには大きく二つの傾向が通底していると考えられる。第一には、教会改革以前の聖俗混交状態を単純に腐敗と断じるのではなく、具体的文脈のなかでポジティブにとらえようとする姿勢である。第二に個々の現象を、例えば西ヨーロッパ、スペイン、あるいはカタルーニャといった広域スケールの一般論に帰せず、よりミクロな地域社会の文脈に則って分析する傾向である。本発表ではカタルーニャ最初の改革教会会議が開かれたジローナ、当初カタルーニャで唯一「グレゴリウス改革」に支持を表明したバザルーに注目しつつ、教会という視点から改革期の当該地方社会を照射したい。その際、多様なレベルの領域統合、ならびに聖俗両エリート層の再編現象などが論点になると思われる。

## 12-13 世紀における北フランス中規模領邦とコミューン

## —ポンテュー伯領を素材に—

大浜 聖香子

中世フランス史において、コミューンは自治獲得のための都市領主層への抵抗の成果と評価されてきたが、近年では、コミューン文書の授与を、領主による領主権確立の手段や、領邦君主による「くにの法」統一の手段として捉え、コミューンと統治史を結びつける視点が登場し、領主の広域統治の枠組みにおいて、領主の権威の定着に不可欠な存在として見なされている。一方統治史においても中規模領邦という新たな観点が登場した。中規模領邦はその規模上、細心の注意や対応を領内の社会集団へ払わなければならない、それらとの密な関係が不可欠である。それゆえ中規模領邦は、君主のコミューン授与政策、コミューンと君主の関係の検討に適していると考えられる。

本報告ではポンテュー伯領という北フランスの中規模領邦を対象に、伯の統治活動におけるコミューンの役割を検討する。ポンテュー伯領内においては、全20件のコミューン文書が発給された。その内で伯により、1184年のアブヴィルへの授与を皮切りに、12世紀後期から13世紀前期にかけて16通が発給され、コミューンを伯の影響下へ置くための取り組みが本格化した。伯は影響力の強化と広域的統治の拠点構築のため、伯領内の法の統一を試みた。それゆえ領内の共同体へ発給された文書は全てアブヴィル文書を基に作成された。伯の主要拠点であるアブヴィルの文書を伯領全域へ普及させることで、アブヴィルが各共同体の長と見なされ、伯権が点在する諸共同体へ浸透することを目指したのである。

これらの伯が発給したコミューン文書群を素材とし、アブヴィル文書を中心に、コミューン文書の諸条項におけるコミューンと伯の権利を検証することで、文書に反映された、伯とコミューンとの関係を明らかにすることを目指す。同時に、伯領内の他の領主が発給したコミューン文書を併用し、伯領内における伯と他の領主によるコミューンを巡る権利の絡み合いを検討し、伯のコミューン政策から垣間見られる、伯領内における都市の位置や、伯の伯領統治における重要性を検討する。その際伯の領邦君主としての広域統治志向を確認すると共に、コミューンや他領主層への配慮や譲歩を余儀なくされる、中規模領邦の限界性に着目する。その上でこのポンテュー伯領という中規模領邦を、当時のフランスやピカルディのコンテクストの中に位置づけたい。

## 15 世紀の教会改革

## —コンスタンツ・バーゼル両公会議の比較を通して—

青野 公彦

コンスタンツ公会議 (1414-1418) は、1378 年に勃発した西欧大シスマ (教会大分裂) の解決をまず第一の課題として開催されたが、他方そこでは、それと並んで教会の頭と肢体の改革 (reformatio ecclesiae in capite et in membris) が主要な課題とされたことはよく知られている。教会改革は個々の聖職者の利害に直接かかわったから公会議の審議も当然紛糾したが、最終的に第 39、40、43 の各会期の諸教令や新教皇と各ナツィオ (国民) とのコンコルダート (政教協約) によって決着をみた。

ところでコンスタンツ公会議で達成されたこのような改革の評価をめぐっては、19 世紀のヒューブラーによる古典的研究以来、従来おおむね不徹底、もしくは失敗とみなされてきた。それに対して、スタンプは 1994 年に刊行された研究の中で、公会議に参集した聖職者たちの改革の観念やイメージを検討した上で、彼ら同時代人の判断基準からすれば、むしろそれは成功とみなされると主張している。このような同時代人の認識から出発するスタンプの研究姿勢はもちろん高く評価されてよいであろう。しかし、同時代人の認識といえども一通りではなく、様々な対立する立場があったはずである。事実、その後のバーゼル公会議 (1431-1449) は開催途中で分裂し、反教皇派は教皇を廃位した上に新教皇を擁立し、改革についてもより徹底した決議をおこなっている。

そこで本報告では、コンスタンツ公会議で達成された多岐にわたる改革が、バーゼル公会議ではどのように認識され議論されたのかをみってみる。その上で両公会議における改革に関する議論や決議を比較することで、コンスタンツ公会議開催の時点ですでに潜在していた多様な対立関係をより明確にしてみたい。また、そのことを通じて、コンスタンツ公会議における改革の教会史上の意義を再検討してみたい。

## 18 世紀ケルンへの遠距離巡礼と市営巡礼宿舎

猪刈 由紀

帝国都市ケルンは中世盛期以来、全ヨーロッパに知られた巡礼都市であった。本発表では、ケルンへの遠距離巡礼、およびケルン市民らによる、ケルンからその近郊への巡礼の双方を、近世 (16-18 世紀) に重点を置いて考察した博士論文の内容のうち、ケルンへの遠距離巡礼とケルン市参事会の対応を中心に報告する。論文では中世から近代への過渡期に、古くからの伝統にもとづく個人、あるいは少人数での遠距離巡礼と、近世になって新たに現れた、兄弟団に組織された巡礼の双方について、巡礼という行為が巡礼者自身、都市住民、またケルン市の政治的・宗教的支配権力 (参事会、ケルン大司教) にとっていかなる意味を持ち、またこれらの当事者らが、巡礼を介してどのような関係を結んでいたのか、ケルン市およびケルン大司教区文書館所蔵の複数の未刊行史料を中心に分析した。中世以来 18 世紀にいたるまで、ケルン市当局は、キリスト教的隣人愛の観点から、また対抗宗教改革期には、カトリックの伝統に忠実であり続けるためにも、ケルンを訪れる巡礼者を援助し続けた。市民が設立し、市が運営管理していた 2 つの巡礼宿舎では、巡礼者は原則 3 日間無償で宿泊でき、食事も供されることになっていた。しかしその一方、特に 17 世紀以降、市外から多数流入する貧民対策との関連で、巡礼宿舎での宿泊を希望する巡礼者への管理、統制は次第に強まる。当初は偽の巡礼者を排除し、「真の」巡礼者のみを援助しようとする試みであったが、やがて巡礼そのものの意義が疑問視されるに至り、最終的に巡礼宿舎は廃止され、その資産は市民のための福祉施設の設立に充てられることとなる。この一連の変化は、市の政策担当者および市民の価値観の変化を反映したものであるが、複数の史料を検討した結果、流浪する貧民の急増、ケルン市内の救貧需要の増加、宗派对立の相対的弱まり、ケルン大司教および帝国政策担当者の啓蒙主義的信仰理解および実利主義など、都市内外の政治・経済・社会的諸要因が関連しあって生じた結果であることが明らかになった。発表ではこの変化を中心に検討するが、それとあわせて巡礼慣習の長期的持続を支えた、巡礼者自身、および彼らを支えた参事会、市民、教会それぞれの意図と心性にも出来る限り言及するつもりである。

## フランス第二帝政における海軍改革 -クリミア戦争での経験を通じて-

杉本 宗子

フランスは、「無知・無関心・無理解の上に海との関係を築いてきた」といわれるように、海軍は陸軍ほど重視されてこなかった。そうした状況で、海に関心を持ち、海軍に力を注いだのがリシュリュー、ルイ 14 世とコルベール、ルイ 16 世、そして第二帝政のナポレオン 3 世である。特に第二帝政の海軍は、一時的ではあるが技術進歩の点で他のヨーロッパ諸国に比べて優位に位置していた。その発端は 1854 年～1856 年に起こったクリミア戦争にあった。フランスはトルコに侵入してきたロシアに対し、イギリスと同盟を結び、連合軍として戦った。こうしてヨーロッパにおける 40 年間の平和は終わりを告げた。仏・英にとって、ロシアとの共通の国境、黒海・バルト海・白海・太平洋の広大な沿岸部、においてロシアを封じ込めるという海洋封鎖戦略をとった。工業時代の最初の戦争といえるクリミア戦争は、「帆船と木」から「蒸気と鉄」へ移行した転換期を示すことになった。

このような技術革新とともに海軍組織が大きく構造改革された。戦争遂行に必要である迅速な行政組織と、一貫した意思決定ルートを目指して、4 人の海軍・植民地大臣が、行政改革、将校団の権限に取り組んでいった。

以上の二点に加え、第二帝政期のフランス海軍は、クリミア戦争によりフランスのヨーロッパ内での威信を回復させたという点で、最も大きな貢献をしたといえる。それまでフランスは、1815 年のウィーン条約下で、ヨーロッパからの孤立という図式の中にいた。ロシアはその中で、「仲介役」を演じたのである。クリミア戦争によって、フランスは、ロシアが負っていたこの役割を手に入れると同時に、威信を取り戻したのである。フランスは、ロシアという一つの国が海の制圧によって減速した歴史的事実を経験し、海洋支配の重要性を再認識することになった。この結果、これ以降、植民地あるいは海洋戦略基地拡大の道を進んでいったのである。事実、フランス植民地は第二帝政期にそれまでの 3 倍に拡大した。

タイユミットは「歴史家によってめったに言及されないクリミア戦争の海軍面は重要である」と述べている。本発表の目的は、フランス第二帝政期における海軍が、どのようにして技術進歩を遂げ、組織の構造改革に挑戦し、最終的にヨーロッパ内での威信を回復したのかを、クリミア戦争での経験を通じて紐解くことにある。

## 民兵から国民衛兵へ -革命初期モンプリエにおける国民衛兵隊員の分析から-

高田 浩介

1789 年 7 月 16 日パリで結成されていた民兵(milice bourgeoise)は、司令官として迎えたラファイエットにより名称を国民衛兵と変えた。そして、大恐怖や市政革命といった出来事を背景に、フランス中に国民衛兵の組織化が急速に広まっていくというのが、革命初期における国民衛兵形成に関する通説である。

これまでの国民衛兵研究史では、このような革命期の国民衛兵組織化の急速な展開の理由をアンシアン・レジーム期の民兵の存在に求めていた。しかしながら、近年の研究成果はむしろアンシアン・レジーム期の民兵と革命期の国民衛兵の繋がりに疑問を投げかけ、革命という断絶的な側面をあらためて見直している。この点を鑑みると、民兵から国民衛兵へという問題において重要なのは、むしろ革命期に地方それぞれの事情で結成された民兵がどのようにして国民衛兵へと再編成されたのかという問題ではないだろうか。

そこで問題となるのが、国民衛兵の構成を規定した 1790 年 6 月 12 日法である。同法は、隊員資格は能動市民に限り、民兵の名の下に活動している部隊の廃止を命じた。このような規定が、それぞれの地方にすでに存在していた民兵や国民衛兵にどのような影響を及ぼしたのであるか。

また、同法令は 91 年体制を規定する 1791 年憲法の特質である有産者寡頭制支配の根幹にも関わる。それは、同法令の第一条が能動市民としての権利行使の条件に、国民衛兵登録簿への登録を不可欠としたためである。したがって、91 年体制下における国民衛兵について検討することは、地方における革命受容の実態を検討するという重要な意味も持つのではないだろうか。

本報告ではレンヌやマルセイユのような革命初期にパリに先んじて民兵を結成していた都市として知られているモンプリエを対象として、革命期の民兵から国民衛兵への再編成の問題を隊員名簿の分析を通して検討する。一体どのような隊員が革命初期の民兵隊に参加し、また、1790 年 6 月 12 日法による国民衛兵隊員資格の能動市民への限定がモンプリエにおける国民衛兵の形成にどのような影響を及ぼしたのか検討したい。

## 18 世紀イングランドにおける『夫婦間暴力』

## -離婚訴訟の記録から-

赤松 淳子

18 世紀イングランドの夫婦関係については、これまで数多くの歴史家が考察を行ってきた。1970 年代にローレンス・ストーンは、18 世紀において夫婦関係が「家父長制」から「情愛」に基づく個人主義へと移行したとする説を提唱した。近年の女性史研究はストーンの説を批判し、むしろ 18 世紀の夫婦関係においては一貫して夫が権力を握っていたのであり、「夫婦間暴力」は強固な「家父長制」の存在証明である、と主張する

本報告では、近年の女性史研究に対していくつか疑問点を提示し、18 世紀の夫婦間の権力関係のあり方について、特に教会裁判所における離婚訴訟という文脈から再検討を行う。分析史料として、カンタベリ大主教管区の上訴裁判所であるアーチ裁判所の訴訟記録 (Cruelty 訴訟、156 件) と、法廷弁護士のノートを使用する。

第一に、本報告では歴史家が用いる domestic violence という 18 世紀には存在しなかった概念を使用せずに cruelty という 18 世紀に使用されていた概念を中心に分析をすすめていく。18 世紀イングランドにおいて (特に司法の場において) 論議されたのは、夫の violence そのものではなく、その violence がどれほど酷い (cruel) ものであったかであった。

これと関連して、二点目として離婚法廷において、夫の暴力を受けた妻がどのような訴えを法廷に提出し、法廷がどのように対処したかについて考察する。近年の歴史家は、法廷に訴えることができた夫の暴力は重度の身体暴力であったと主張している。本報告では cruelty の法的基準を明らかにしたうえで、逆に様々な種類の暴力が妻と弁護士によって戦略的に訴えられていた事例を取り上げる。

以上の点から本報告では、妻の身体・精神面での安全と、これらに対する夫の権力行使のあり方に関する法廷証言を用いて、18 世紀の離婚法廷が、妻の心身に対する夫の権力行使を認めつつも、それに法的枠組みによる「制限」を加えていたことを明らかにする。

最後に 18 世紀の妻たちが、夫による様々な種類・レベルの暴力を訴えるようになった背景として、18 世紀における文化・社会コードの役割について考察を加えたい。

## 世紀転換期ドイツにおける自転車の普及と都市化

## -ビーレフェルトを事例として-

西 圭介

ドイツ自転車工業はアメリカ製自転車との価格競争を通じて、後の大量生産システムに連なる工場内生産技術・組織を発展させ、ドイツ自転車小売業においても競合する多様な販売組織が設立されることによって自転車はさらに安価に供給された。この価格下落を通じて、世紀転換期に生活を改善させていた労働者の一部が自転車を購入し始めるのである。このような自転車は、実用性 (通勤手段) と娯楽性 (週末のサイクリング) を共に兼ね備えた最初の大衆消費財であったと言える。本報告では、これまでほとんど注目されてこなかった自転車の普及と都市化の関連を考察する。

世紀転換期ドイツは工業化と都市化において一つの節目を迎える時期にあたる。この時期に工業部門における就業者数が農業部門におけるそれを凌駕し、居住者が 2000 人を越える都市に居住する人口の比率も 50% を越えるに至る。このような工業化と都市化の進展を背景として、1900 年のプロイセン統計では住民数などと並んで、住居と仕事場の分離について調査され、世紀転換期に通勤という現象が注目されていたと考えられる。そしてこの分離を可能とさせたのが鉄道や自転車という近代的移動手段の発達であった。

ドイツにおける自転車生産の中心地のひとつであったビーレフェルトでは、世紀転換期にミシンや自転車などを生産する大規模工場が市部に多く立地していた。同時期にビーレフェルトの主要ミシン・自転車製造企業において労働者の賃金上昇、労働時間の減少が確認され、ビーレフェルトの居住環境は他の都市と比して良好であった。こうして当地においてこの時期には、一部の労働者が郊外に立地する良好な住居を探し始めたのである。本報告では、ビーレフェルト市立文書館に所蔵されている、ビーレフェルト市の郊外と位置づけられるゲマインデ・ガッダーバウムのサイクリスト登録簿を検討する。それによって、当地においてどのような職業の人々が自転車に乗っていたか、が明らかとなるだろう。

以上の検討を踏まえることによって、これまでの研究でほとんど注目されてこなかった自転車が、通勤という社会現象を可能とさせた個人移動手段の先駆けであったことが明らかとなる。

## 19世紀前半におけるセーヌ河流域の運河建設 —「海の港パリ “Paris Port de Mer”」へ—

東出 加奈子

本報告は、セーヌ河の水運領域の拡張にむけた運河建設をめぐる議論を通して、19世紀前半に「海の港パリ “Paris Port de Mer”」と称されるようになった背景を考察する。セーヌ河流域の運河建設を検証することは、内陸に位置するパリの港における固有の問題をからめることによって、海港とならぶ荷揚げ量となった要因のひとつを明らかにできると考える。

これまでセーヌ河については、とくに研究対象として取り上げられることはなく、パリ通史のなかであたりまえの存在として触れられるにすぎなかったが、近年ではパリとセーヌ河の関わりを対象としたテーマに関心が高まりつつある。しかしながら、パリの港に輸送されるセーヌ河の水運に焦点をあてた研究はなされていない。パリの中心部を貫くセーヌ河が、都市への重要な輸送網を担っていたのは周知のことであるが、19世紀半ばに鉄道が建設されたことから、研究対象は鉄道などの陸上輸送手段が主流となっていった傾向がある。こうした経緯から、これまでセーヌ河の水運について明らかにされてこなかったが、鉄道建設以降の河川輸送量を見れば衰退することなくむしろ増加をたどることから、鉄道が登場する以前である19世紀前半にセーヌ河流域の拡張が進められていったことに着目し考察を試みる。

フランスにおいて、17世紀には17の運河建設の計画があったのに対し、18世紀には108になり、フランス革命により一時中断するものの、19世紀においても計画の議論がなされていく。パリでは、フランス革命後の著しい人口増加によって食糧や生活物資の輸送手段が重要課題となり、19世紀に入り運河建設が急速に進められることになる。水運物資の受け入れは、パリの上流・下流へと拡張されるとともに、人工の河川である運河が建設され、運河の港にも拡張されていった。こうした動向を、18世紀末から19世紀前半にかけての、国民議会における議論や、運河建設計画書、デクレ草案などの資料をもとに、運河建設に至るまでの経緯を明らかにしていく。

## 慈善と医学のあいだで —20世紀初頭ドイツにおける肢体不自由児保護事業—

中野 智世

本報告は、従来の歴史研究においてはあまりなじみのないテーマである「障害」あるいは「障害者」を研究対象としてとりあげる。報告者の研究領域であるドイツ近現代史においても、障害者は、ナチ体制下のいわゆる「安楽死政策」の被害者集団として知られるのみであり、それ以外の文脈ではほとんど登場しない。しかし、かつて女性や民衆、エスニック・マイノリティといった社会集団が「見えない存在」であったように、障害者もまだ「見えていない」だけであって、彼らもまた歴史の中に存在していたことはいまでもない。近年では、英米に続いてドイツでも、「ディスアビリティ・ヒストリー」の名の下に、障害者という存在を歴史的に掘り起こす作業が始まっている。報告者は、こうした問題意識にたつて、近代ドイツにおける障害・障害者の歴史に取り組もうとするものである。

具体的に検討の対象とするのは、身体障害者、とりわけ当時「クリュッペル (Krüppel)」と称された肢体不自由者である。クリュッペルと呼ばれる人々は、ドイツ語圏においてはすでに中世には知られており、道端の「乞食」集団の一員として、忌むべき異形の存在として、あるいは宮廷の道化として、多様なイメージで語られてきた。しかし、彼らの存在が、特に肢体不自由児が保護・救済すべき集団として認識されるようになったのは19世紀末になってからであった。

ドイツにおいて、クリュッペルの「救済」に最初に着手したのはキリスト教慈善であり、プロテスタント系社会事業組織として1848年に創設された「国内伝道会」がその主たる担い手であった。しかし20世紀に入ると、ここに新たな「救済主体」が加わる。ギブス治療や麻酔、そしてレントゲン技術の確立により外科からようやく分離しつつあった整形外科医らがそれである。彼らは、聖職者らが先鞭をつけた「救済事業」を部分的には踏襲しつつも、医学的観点から肢体不自由児を定義づけ、治療を目的とした「救済」を訴えていく。

本報告では、キリスト教慈善と近代医学という相対立する世界観に依拠するふたつの「主体」が、生成しつつある福祉国家を背景に、それぞれいかなる論理で肢体不自由児の「救済」に関わり、どのように対立・競合し、あるいは妥協していったのかを考察していきたい。

## 近代家族と地域的紐帯

-世紀転換期ハンブルクにおける在宅看護・家事援助協会を事例として-

馬場 わかな

本報告の目的は、世紀転換期のドイツ・ハンブルクで創設された在宅看護・家事援助協会を事例として、生成過程にあったドイツ社会国家における家族支援の諸相を明らかにすることにある。

当時のドイツでは、年間数千人の女性が妊娠・出産が原因で死亡していただけでなく、特にハンブルクでは、猩紅熱やジフテリアなど、成人は好発年齢でない急性感染症の患者が女性に多かった。しかし、女性、とりわけ専業主婦は、病気の際や産前産後に十分な休息を取るのには不可能で、家族の生活維持のために自らの健康を犠牲にせざるを得なかった。世紀転換期においてはなお、男性稼得者にしか疾病保険が適用されないことも多く、また、保険の給付を受けられた場合でも、それを家族の生活費に充ててしまう女性が少なからずおり、経済的観点からも、妻が必要な期間、病院で適切な治療や休息を享受するのは困難であった。このような事態を受け、ハンブルクをはじめとするドイツ諸都市で在宅看護・家事援助協会が創設され、低収入の家庭を中心に、産褥期の女性や新生児の世話、家事の援助を行うようになる。類似の試みは、教区単位で既になされていたが、同協会の活動は、ハンブルク全域に及んでいた点で重要である。末端の活動を担ったのは、支援を必要とする家庭の近隣に居住している住民であった。

在宅看護・家事援助協会については、世紀転換期から始まり、第一次大戦を機に本格化する母子保護事業を扱ったStöckelの研究(1996年)などで言及されているが、いずれもこの問題に正面から取り組んではない。ハンブルクの同協会は、国による母子保護事業の開始後は、病気の際の支援を主軸に活動を継続しており、母子保護事業という枠組みから捉えるだけでは不十分だといえる。同協会が、民間主導ではありながら、都市自治体とも緊密な関係にあり、公的救貧事業の一部として位置づけられていたことからしても、より広い枠組みで捉える必要がある。同協会は、社会のセイフティネット機能が教会や市民による慈善活動から都市自治体へ、さらには国家へと移行するという、社会国家の生成過程を照射する格好の事例なのである。

この分析から、近代家族を取り巻いていた状況を解明するとともに、生成期の社会国家の特質について考察するのが本報告の課題である。

## カナダにおける脱植民地化と1964年『大國旗論争』

津田 博司

本報告は、カナダにおける1964年の新国旗制定をめぐる議論を題材として、イギリス帝国の衰退に伴う旧ドミニオンのナショナル・アイデンティティの変容をたどる。

「大國旗論争 (Great Flag Debate)」と呼ばれる論争は、直近の総選挙公約に「カナダ固有の国旗の制定」を掲げて勝利した、レスター・ピアソン率いる自由党の問題提起から始まった。この企てに対して、ジョン・ディーフェンベーカー前首相率いる進歩保守党は猛反発し、慣習的国旗として用いられてきたイギリス商船旗の維持を求めて、1年にわたる対立を巻き起こした。この論争は、歴史的にイギリス本国および帝国との同質性にアイデンティティを見出してきたカナダが、脱植民地化とともに「国民国家」としての固有のシンボルを創出せざるをえなくなった変化を示している。

大國旗論争は現行のメープルリーフ・フラッグの制定という帰結だけでなく、その議論の過程で示された「カナダ」像の多様さにおいて、注目に値する。例えば、新国旗制定派はケベック選出のフランス系議員が含まれており、彼らにとっての新国旗は、二つの建国民族が「カナダ人」としてお互いを認め合う、未来志向の「新しいカナダ」の象徴とされた。こうした論理は、「メルティング・ポット」型社会から多文化主義社会への移行という、当時の思想動向の反映と考えられる。また、イギリスの歴史的伝統を「新しいカナダ」の中核ととらえていた新国旗反対派も、むしろ非イギリス系の「カナダ人」がイギリス商船旗（あるいはユニオン・ジャックの意匠）を「カナダ的民主主義」の象徴として支持していると喧伝し、単純な守旧主義から距離をおいた。新国旗制定派と反対派の両陣営は奇しくも、それぞれの論理に基づいて、多様な出自をもつ「カナダ人」を包摂しうるナショナリズムをともに希求していたのである。

本報告はこうした新たな国民統合のシンボルの模索を歴史的な脈に位置づけ、脱植民地化後のカナダにおける多文化主義の台頭とナショナリズムの変容（「多文化主義的ナショナリズム」）について、一つのケーススタディを提示する。ここでは、文化的他者としての隣国アメリカへの言及、同じ旧ドミニオンであるオーストラリアのホイットラム労働党政権への影響など、狭義の「カナダ史」をこえるトランスナショナルな連関が検討されることになる。

## 西ドイツAPO期の『対抗的公共圏』の展開

-ハンブルク地域の反シュプリングー・キャンペーンを中心に-

田中 晶子

1960年代末、西ドイツで展開されたAPO（議会外反対運動）では、アクセル・シュプリングー出版社をはじめとする既存のマスメディアに代わる新しいメディア・言論空間「対抗的公共圏」の創出が主要な目標のひとつとして掲げられ、さまざまな試みがおこなわれた。

これまでの研究史では、APO期（1967-1970）の「対抗的公共圏」は、既存のマスメディアの影響を払拭できない、街頭での集団的な示威行動を中心とした過渡的で未熟な存在とみなされ、1970年代後半の「新しい社会運動」期に確立するアルタナティブ・メディアの単なる前史として理解されてきた。

本報告の目的は、APO期の「対抗的公共圏」を、ハンブルクのAPO組織の宣伝活動を対象として取り上げ、地域的なAPOの展開と同時代の青少年の対抗文化運動との相互的な影響という観点から再考し、「長期の1960年代」の社会変化の中に位置づけることにある。

1967年6月2日のオーネズルク射殺事件を契機として、SDS（ドイツ社会主義学生同盟）などのハンブルク大学の学生組織は、大学内の読者・聴衆を対象とした小規模な啓蒙キャンペーンや学生新聞の制作から、市街地でのハンブルク市民を対象とした大規模な示威行動を中心とする宣伝活動へと転換する。この「路上の対抗的公共圏」の拡大にともない、新左翼の政治運動と青少年の対抗文化運動の間で、人的・文化的な相互浸透が急速に進展した。

このような融合を可能にしたのは、(1) 1960年代初頭より社会階層を横断するかたちで次第に形成された「青少年」に特化した市場・文化を基盤とした世代意識の高揚であり、(2) APO前半の主導権を握った反権威主義派に大きな影響を与えた、フランクフルト学派の疎外概念とメディア観の拡散であった。反権威主義段階の宣伝活動における直接性の強調と個人の心理的次元での変革の重視は、マスメディアを媒介とすることで、「対抗的公共圏」のなかで拡散し、対抗文化運動による流用と融合をもたらしたと考えられる。

両者の融合は、非常事態法案可決後、APOの分裂が加速するにつれて、地域的なAPOの再編を目指す反権威主義派と、規律化された宣伝活動と政党型組織を志向するKグループとの対立が深まるなかで、失われてゆくのである。

## 連合軍占領期におけるドイツ警察の『現場』

-ゲルゼンキルヒェン市の事例-

金田敏昌

本報告の課題は、第三帝国の崩壊を経て連合軍の管理下に置かれたドイツ警察の業務現場に着目し、この現場の動きに住民が果たした役割を明らかにすることにある。こうした問題に関する先行研究を探ってみると、実証的な分析は進められていないことがわかる。というのも、ドイツにおいて戦後警察の歴史研究が本格化の兆しをみせたのは、近年のことだからである。

この研究動向のなかで、戦後警察における「零時点」の問題は、当初から主要な論点の位置を占めてきた。連合軍の占領政策がドイツ警察史の一面に変革の画期をもたらしたことは、明白な事実である。たとえば、英米地区におけるドイツ警察の地方分権化は、従来の国事警察機構を撤廃する試みであったし、広義における行政警察課題の解消と司法警察化をめざした脱警察化の局面は、ドイツ警察が伝統的に培ってきた現場領域を大幅に縮減しようとする動きでもあった。

他面において見逃してはならないのは、改革綱領の運用をめぐる（西）ドイツ人当局が引き起こした反動的事態であり、1950年代にかけての州警察化に至る過程と旧ナチ関係者に開かれた再雇用の実態である。かかる事態は、戦後復興期における公安機能の強化とも連動するものであった。このように、警察制度・組織上の歴史的連続・断絶の多様で複雑な局面が指摘されるようになってきた。

しかし、個々の局面に促進・抑制的な作用を来したミクロレベルのファクターには、省察の目がむけられていない。このファクターは、ドイツ警察が手がけた現場の業務環境に依存するものであり、末端の警察（官）による活動報告や事件記録をとおして浮かび上がってくるものである。こうしてみえてくるドイツ警察の現場は、情報統括業務の机上で閉塞する空間としてではなく、ひろく社会のなかで住民感情・民意にも左右される動的なひろがりとして捉えられるだろう。以上の経緯から、本報告では、国事警察機構の徹底的な解体を企図した「英国モデル」が実践された地域のなかでも、進駐直後から長期にわたって自治体警察化を経験したゲルゼンキルヒェン市警に注目し、その現場の一動向に迫ることとする。具体的に、日々作成された雑多な市警文書をとおして、警察（官）が犯罪事情のみならず、多岐にわたる経済・政治・社会情勢を報告するなかで、如何にして住民の動静を知覚するとともに課題を伝えようとしていたのかを明らかにする。

La vie des combattants de la Grande Guerre.  
Questions et controverse historiographique

Frédéric Rousseau

Depuis une quinzaine d'années, les historiens français de la Grande guerre s'intéressent à l'expérience combattante, cherchent à approcher la vie des combattants dans les tranchées; compte tenu des souffrances atroces imposées aux combattants de la Première Guerre mondiale, la question centrale est celle de la ténacité exceptionnelle des soldats. Or, sur cette question, les historiens français ne sont pas tous d'accord; un courant dominant estime pouvoir affirmer que le sentiment patriotique, adossé à une profonde haine de l'ennemi et un esprit de croisade, explique la ténacité des combattants qui auraient finalement « consenti » à la guerre durant 50 mois; d'autres historiens, pensent au contraire que si le sentiment national explique effectivement en partie le succès de la mobilisation d'août 1914, ce facteur ne permet pas de comprendre la formidable patience des combattants de 14-18. Aussi, contestant la validité de cette explication monocausale par le « consentement patriotique », ces historiens invitent au contraire à considérer tout un faisceau de facteurs explicatifs seul capable de rendre compte de la variété des situations et de la complexité de l'homme en guerre.

1930年代スイスにおける『ソーシャル・ツーリズム』の形成  
-スイス旅行公庫協同組合とツーリズムの転換-

森本 慶太

第二次世界大戦後にヨーロッパ諸国で発展した「ソーシャル・ツーリズム」の構想は、社会的エリート・外国人富裕層を対象とした従来型のツーリズムを転換し、それまで観光旅行に無縁であった人々に対して、その普及を企図するものであった。この「ソーシャル・ツーリズム」の先駆的事例のひとつとして、スイス旅行公庫協同組合（1939年設立）が挙げられる。この団体は、労働者層への観光旅行の普及を目的として、連邦政府の支援のもと、労働組合や観光業界が中心となって設立され、現在にいたっている。

この団体が発足した背景のひとつには、社会民主党の路線転換（1935年）、金属・時計産業部門の「労使間平和」成立（1937年）、それにファシズムに対抗する文化的イデオロギー運動「精神的国土防衛」などに代表される、スイス国民統合の流れがあった。他方で、もうひとつの背景として、当時の観光産業が抱えていた問題もあった。1930年代のスイスでは、大恐慌の到来で沈滞する観光産業の復興という問題意識から、ツーリズムの将来像をめぐる議論が展開されており、その流れの先にこの団体を位置付けることができる。

この団体は、第二次大戦が勃発したため、設立当初に実質的活動が見られなかったこともあり、スイス現代史研究の文脈で位置づけられることは近年までほとんどなかった。また、観光の歴史の文脈においても、1930年代のツーリズムの変化のなかで関連付けて議論されることも少ない。しかし、戦後スイスの社会政策、ならびにツーリズムの展開を規定する構想がこの団体のなかに見られるのであり、その歴史的意義は決して小さいものではない。

本報告では、上記のような背景を踏まえて、この団体が事業を通じて進めようとした国民統合のための方策、それに既存の商業ツーリズムとの関係を検討する。その際、1930年代後半に生じた「マス・ツーリズム」をめぐる論争を参照する。以上の検討を通じて、19世紀後半以来、外国人富裕層の観光地として発展してきたスイスにおけるツーリズムのあり方がどのように転換していったのか、その一端をあきらかにしたい。



## アメリカ歴史教科書における第二次世界大戦～冷戦初期 -原爆投下決定の記述を中心に-

藤田 怜史

本報告は、アメリカ合衆国で用いられている歴史教科書の中で、第二次世界大戦から冷戦初期、特にその中でも原子爆弾投下の問題がどのように記述されているかを検証する。本報告の目的は大きく分けて二つある。一つは、原爆投下に関する具体的な記述内容と、その時代ごとの変化を明らかにすることである。そのために、本報告では原子爆弾に関する記述内容を詳細に分析する。もう一つの目的は、どのような歴史の流れの中で原爆投下という出来事が起き、それが後の時代にどう影響したのか、これらの点を教科書がどう記述しているかを明示することである。この目的を達成するため、本報告では、第二次世界大戦から冷戦初期までを論じる歴史教科書の章・節・項を整理し、その中で原爆投下がどの歴史の文脈の中に位置づけられているかを検討することになる。

一つ目の問題について、年を経るごとに歴史教科書における原爆投下記述の量は増加していることが指摘できる。50年代ごろの教科書は原子爆弾が投下されたという事実のみを単に記述していたが、60年代ごろから、なぜ投下されたのかと問われるようになっていく。それに対する回答も、戦争の早期終結というきわめて単純なものから徐々に変化していった。高校生用の教科書でも、早いものでは70年代ごろから戦争の早期終結に加え、冷戦を見越したソ連の牽制などを指摘するものもあった。特に90年代以降の変化は顕著で、教科書によって様々ではあるが、政府・軍内部での投下反対論など原爆投下決定の背景にあった諸問題について記述されるようになった。

二点目については、二次大戦の全体像の描き方が時代によって、あるいは教科書製作者によって様々であるのに対し、原爆投下が基本的に対日戦／第二次世界大戦終結の文脈に位置づけられており、この傾向は時代を問わずほぼ共通していることがわかった。すなわち、原爆投下はそもそも第二次世界大戦における軍事的行為であり、第二次世界大戦終結の一助となったという点において歴史的に重要だと示唆されていると考えられる。しかし、90年代以降、原子爆弾の登場が戦後世界にもたらした遺産について記述するなど、原爆投下と現在の問題を意識的に関連づける教科書が現れ始めていることも重要な変化として指摘できよう。こうした変化がますます促進していくのか、今後も注目し続ける必要がある。

## 第二次世界大戦中のアルザスにおける自治主義者の『対独協力』と『抵抗活動』-ジョゼフ・ロッセを例として-

末次 圭介

本報告では、戦間期にアルザスで活躍した「自治主義者」による第二次大戦中の「対独協力」および「抵抗活動」の概要を示し、戦間期を代表する自治主義者ジョゼフ・ロッセ (Joseph Rossé, 1892～1951) の役割を様々な側面から検証する。

第一次大戦後フランスに復帰したアルザスでは、ドイツ時代の優れた諸制度の維持、宗教・文化・言語的権利などの維持を要求し、フランス中央政府からの自立や自治権拡大などを求めて自治主義運動が勃興した。自治主義には穏健派から過激派まで多くの潮流が存在したが、UPR (アルザス人民共和連合) のジョゼフ・ロッセらが担い手となった政治的自治主義は戦間期を通して大きな影響力を有した。第二次大戦勃発後、1940年にはフランスはドイツ軍に大敗し休戦協定が結ばれた。ドイツは事実上アルザスを「併合」し、厳しいドイツ化政策・戦争動員が進められた。

アルザスを支配するにあたり、ドイツ政府はロッセをはじめとする自治主義者の利用を図り、支配体制に取り込もうと試みた。また、自治主義者からもナチ党の要職に就任し、住民統制や動員にも加担するなどナチに協力する動きが見られた。一方で、ナチ支配に反発し抵抗する者もおり、当初の宥和的姿勢を改め様々な形で抵抗運動に加担したり、あるいはナチから得ていた信頼や地位を利用して秘密裏に非合法活動を行ったりする者も存在した。

ロッセは大戦中を通してナチと関係を維持し、形式的ながら各種の役職に就任し、表面的にはナチから信頼を得て活動した。一方、自ら経営する「アルザシア社」を通じた反ナチ的書物の秘密出版活動のほか、独立国アルザスを目指しヴィシーその他で米・仏政府関係者と接触するなど、様々な形で精力的に反ナチ的な活動に参加している。またドイツ政府官僚に対し働き掛けるなどの形でアルザス人被害者の救出を試みるなど、その興味深い活動は注目に値する。戦後の裁判では彼の「対独協力」が断罪されたが、特に在アルザスの論者の中には大戦中のロッセの活動を高く評価する者も多い。本報告では、ロッセの「対独協力」および「抵抗活動」の特徴や展開、背景などについて論じ、自治主義者としての理念と大戦中の活動の関係、他の自治主義者やナチとの関係にも触れた上で、自治主義者としてのロッセの活動をどう総括・評価すべきかという問題に踏み込んで検証したいと考えている。

## パリ市の音楽政策にみられる『創られた伝統』

—第三共和政時代から第四共和政時代までの『パリ市音楽コンクール』(1876  
～1950)の制度の考察より—

田崎 直美

第三共和政成立とともに政治的転換期を迎えたパリ市議会は1875年、フランス人作曲家のための作曲コンクール「パリ市音楽コンクールConcours musical de la Ville de Paris」を設立した。セーヌ県知事および彼の任命する審査員がコンクール最優秀作品に対して賞金を授与し、市の全面的な後援により作品上演を執行するものである。旧体制の概念を打破し競争原理とともにあらゆるフランス人の参加を促す音楽助成を目指したこの制度は、いわゆる共和主義者のシンボル確立に貢献する「創られた伝統」の一つといえることができる。しかし一方でこのコンクールは、その後のヴィシー政権時代および第四共和政時代にかけて継続的にパリ市独自の裁量にて行われている点も特徴である。その存在は音楽史上注目される作曲家たちの経歴紹介にて言及されてきたにもかかわらず、制度あるいは文化政策の実態は明らかでなかった。そこで本報告は、このパリ市音楽コンクールの経緯と意義を検証することで、19世紀末から20世紀前半の芸術音楽活動に対するパリ市の文化政策の性質を解明することを目的とする。

対象とした時期を通してコンクール規定の基本路線は維持されたが、審査員の構成及び最終審査結果の傾向は時代により変化していた。共和政時代には、審査への市議会議員の影響力の強さが認められる。一方、市議会議員が政府任命制に戻ったヴィシー政権時代には「国民革命」の一環としての帰還捕虜優遇策が見受けられた。第三共和政時代に限定すると、市議会にて急進派が勢力を伸ばしていた初期(1880年代前半)までは新人の発掘と促進の傾向が強かったが、それ以後は「パリ市の名を冠するに値する」完成度の高い作品への授賞、およびその盛大な上演、に対するこだわりが強くなり、保守化していく。また同じ共和政でも、第四共和政時代(初期)には、第三共和政時代に存在した審査員の参加者選出枠が廃止されること、新作でコンクールに参加する新人作曲家ではなく審査員が推薦する作曲家が受賞する場合があったこと、から、参加者よりも制度運営側の権限が強化される傾向が判明した。

「公認」人物による芸術の管理、および審査員を介した国家と首都の両義的關係は、おそらく19世紀後半から20世紀前半にかけてのフランス文化政策の本質である。この性質こそが劇的政変を超えて制度の連続性を支えてきた、と考えられるのである。

## 小シンポジウム I

5月30日(日) 13:10 -16:30 別府大学 メディアホール

## 変動する古代地中海世界のコミュニティ

## 問題提起

周藤芳幸 (名古屋大学)

世界史としての西洋古代史研究—古典学と人類学のはざまで—

## 基調報告

J・ビントリフ (ライデン大学)

ギリシアの都市国家とコミュニティの動態

—社会進化論から何を学ぶか—

Keynote Lecture:

John Bintliff (Leiden University)

The Greek City State and the Corporate Community:

Can We Learn from Social Darwinism?

## コメント報告

長谷川岳男 (鎌倉女子大学)

エトノス・シュノイキスモス・ポリス

—ギリシア人コミュニティのダイナミズム—

司会者：周藤芳幸 (名古屋大学)

## 趣旨説明

## 世界史としての西洋古代史研究 -古典学と人類学のはざままで-

わが国において、古代地中海世界の歴史は西洋史学というディシプリンにおいてのみならず世界史教育の現場においても確固たる地位を占めてきた。古典学が西洋古典学を意味するのと同様に、世界史における古代史が何よりも古代ギリシア・ローマの歴史を意味することは、ほとんど自明といっても良いであろう。そして、これがわが国固有の現象ではなく、「偉大な伝統」としてルネサンス以来の西欧において社会的に構築されてきた古代への認識に由来することは、別の機会に論じた通りである。それでは、西洋古代史研究を「名誉ある孤立」から救い出してグローバル・ヒストリーとしての世界史研究に据え直すためには、いったいどのような作業が必要となるであろうか。その一つの方策は、古典学の伝統的な成果を継承しつつも、通文化的な人類学の理論を参照することにより、西洋古代の歴史を世界史の中で相対化することに他ならないであろう。

この小シンポジウムは、ギリシア考古学の最前線で活躍するライデン大学のジョン・ビントリフ教授による基調講演を中心に、世界史としての西洋古代史の前途を模索することを意図している。社会進化論における「真社会性」という視点から古代ギリシア・ローマ世界のコミュニティの動態を再検討するビントリフ教授の議論はきわめて刺激的であり、ギリシア史・ローマ史それぞれの領域の研究者からのコメント報告ともども、活発な議論を喚起することを期待している。

(周藤 芳幸)

## 基調報告

## ギリシアの都市国家とコミュニティの動態

## -社会進化論から何を学ぶか-

The Greek City State and the Corporate Community:

Can We Learn from Social Darwinism?

ジョン・ビントリフ

John Bintliff

古代ギリシアのポリスは、一般にエリートを中心に組織された農村コミュニティが、オリエント世界との密接な文化的・経済的相互作用、急速な都市化、コミュニティ相互の戦争への制限、識字能力の向上などのプロセスを通じてはるかに洗練された市民社会へと変容したものと理解されている。しかし、これらのプロセスは、いずれも歴史人口学者や考古学者が明らかにしてきたポリス独特の小規模性や、そのように小さな集団において社会的に密度の高い生活文化が創出された理由を十分に説明するものではない。さらに、同様の現象は他の文化においても見られるものであって、そこでもポリスと同じように洗練された文化とアイデンティティをともなう都市国家社会の盛衰を観察することができる。

小規模な都市国家社会の形態と価値観に対する新たなアプローチとしては、社会人類学におけるコミュニティ形成理論、さらにはダーウィン主義生物人類学(ただし、過去20年ほどのあいだにこれらのいずれのディシプリンにおいても歴史的コンテキストとエージェンシーの重要性が指摘されてきている)の援用をあげることができる。以前にもこの方向での議論を模索したことはあるが、この機会にその探求をさらに深め、これらの理論の援用にあたって遭遇する困難の解決を試みたい。具体的には、初期鉄器時代から後期ヘレニズム時代にいたるギリシア都市の市民の家屋の変化に関する近年の先端的な研究成果を論じるが、それは家屋の変化がコミュニティの価値システムの変遷に関する物質的な証拠を与えるからである。

最後に、市民権についてのギリシアとローマの比較、さらには長期的視点からはローマ帝政期の市民コミュニティよりも古典期のギリシア都市国家の方が持続性が高かったことなどにも論を及ぼしたい。

エトノス・シュノイクスモス・ポリス  
—ギリシア人コミュニティのダイナミズム—

長谷川岳男

一般的に広く理解されているポリス形成とは、トゥキュディデスやアリストテレスの叙述に依拠して（例えば Arist. Pol. 1252b; Thuc. I 10. 2）、点在していた村落に居住していた人々が中心市に集住（synoikismos）してなされたというものであろう。その典型とされるのがテセウスの時代になされたアテナイの事例である（Thuc. II 12.1-2. cf Moggi, M. (1976), *I sinecismi interstatali greci*, Pisa, no. 12）。そしてギリシア人コミュニティはこのように集住を達成したポリスとそれをなさずにゆるやかな村落連合であったと見なされるエトノス（ethnos）の2つのタイプで捉えられる傾向がある。これらのタイプのコミュニティは時代が下り、ヘレニズム諸王国やローマという大規模な勢力に対抗するために手を組んで統合度の高い連邦（sympoliteia, koinon、あるいは ethnos と呼ばれる）を形成して更なる発展の展開を進めたが、結局はローマ帝国に飲み込まれてしまったと見なされてきた（Walbank, F. W. (1981), *The Hellenistic World*, London, 158.）。このようにギリシア人コミュニティのダイナミズムを発展的に理解することには、多くの問題があると思われ、Bintliff 氏の基調報告を受けて、彼らがコミュニティに抱くアイデンティティを中心にどのような展望が開けるかを本報告では検討する予定である。

Bintliff 氏はその論考や基調報告において、人間集団は当初、face to face の限界である 150〜200 名を越えると分裂を繰り返すが、土地取得が限界に達し、exogamy の経済的なマイナス面が顕著になると、その集団はいくつかが連合して内的な拡大をなし、500〜600 名規模以上の endogamy な内的に閉鎖された集団になるという、人類学の成果をギリシア人コミュニティに適用している。この指摘はギリシア人コミュニティの実態を考える上で特に示唆に富むと思われる。このような世界史的な視点でギリシア人コミュニティの性格を考えることは、20 世紀末からの知的パラダイムの転換を受けて西洋近代社会の雛型的な認識で古代ギリシア・ローマ社会を捉える傾向の全面的な見直しが進む動きと相俟って必要とされているのではないであろうか。そこで本報告では、このようなコミュニティ拡大の動きとギリシア人コミュニティのダイナミズムを内発的なものと見なしうるのか、特に集住や連邦形成の動きを中心に史料的な問題や碑文での規定内容、そしてやはり人類学で言うところの「無政府社会（stateless society）」論などに注目して考えてみたい。またもし時間が許せば、やはり Bintliff 氏の報告で取り上げられているスパルタ社会の問題や、ヘレニズム期以降のギリシア人コミュニティの変化、さらには eusociality の観点からのギリシア人コミュニティとローマ帝国との比較に関して、近年の研究成果やポストコロニアリズム的な視点から検討したいと考えている。

小シンポジウム II

5月30日(日) 13:10 -16:30 別府大学 3号館ホール

大航海時代における東アジア世界の交流  
—日本をめぐる銀と鉛等の金属交易を中心に—

報告

飯沼 賢司（別府大学）

大航海時代における日本への鉛流入の意義

平尾 良光（別府大学）

鉛同位体比から見た日本の中世戦国時代における南蛮船で運ばれた鉛材料

村井 章介（東京大学）

銀と鉄砲とキリスト教

岡 美穂子（東京大学）

大航海時代のジェノヴァと日本

—ポルトガル船への融資・投資事例分析を中心に—

仲野 義文（石見銀山資料館）

石見銀山の開発と東アジア —銀と鉛をめぐる—

司会者

飯沼 賢司（別府大学）

## 趣旨説明

大航海時代における東アジア世界の交流  
—日本をめぐる銀と鉛等の金属交易を中心に—

16世紀の大航海時代、日本ははじめて西洋の国々の人々と本格的な遭遇をすることになった。鉄砲とキリスト教の伝来がその象徴であった。この時代の研究は、西洋史・東洋史・日本史の枠を越えた世界史的視点が必須な時代である。しかしながら、このような研究は十分に進展していないのが現状であろう。

本小シンポジウムは、このような世界史的枠組の歴史論を展開するために、大航海時代をテーマに西洋史・東洋史・日本史の研究者が議論を行うだけでなく、文字を中心とした歴史学という枠をさらに越え、分析科学（鉛同位体比分析法）とのコラボレーション研究を基礎に置きながら、議論を展開することにしている。この分析法は鉛の4つの異なる安定同位体の比率が各地域の鉛鉱山で特徴的に異なることを用いて、鉛が含まれる金属文化財（青銅、真鍮、鉛製品など）やガラスなどの産地を推定する方法である。

2009年7月、分析科学の平尾良光と日本中世史の飯沼賢司は、「大航海時代における東アジア世界と日本の鉛流通の意義—鉛同位体比をもちいた分析科学と歴史学のコラボレーション—」（『キリシタン大名の考古学』思文閣出版）という論文を共著で発表した。この論文で、16世紀の後半から17世紀にかけて、ポルトガル船、オランダ船、イギリス船、朱印船中国船によって、多量の海外の鉛が日本へ運ばれキリスト教徒のメダイ、鉄砲玉に使用されたことを明らかにした。その主な輸入先は、タイを中心とする東南アジアからであった。

鉛はさほど希少金属でもなく、日本でも大量に生産できる金属であるが、なぜ、大量に輸入したのであろうか。この背景には、当時世界を席卷した日本の銀生産があった。銀の精錬法灰吹き法には大量の鉛を必要としたのである。日本では、銀の生産と鉄砲の使用が鉛の需要を爆発的に押し上げたのである。本小シンポジウムでは、日本の銀生産とその裏にあった鉛の輸入の問題を中心に、ヨーロッパ、東南アジア、中国、日本をつなぐ貿易の意義を新たな学際的研究視点から解明したい。  
(飯沼賢司)

## 大航海時代における日本への鉛流入の意義

飯沼賢司

平尾良光報告でも明らかなように、別府大学平尾研究室のチームの分析によって、大分の府内大友遺跡で出土した鉛製メダイの鉛同位体分析がされ、N領域という、新しい鉛鉱山の領域が発見された。その後、この領域の鉛は、東大寺南大門に打ち込まれた鉄砲玉、熊本県の田中城出土の鉄砲玉、長崎県の原城出土の鉄砲玉でも発見され、その量は出土の玉の三分の一、二分の一に及んだ。N領域は、これまでの中国や朝鮮半島や日本の鉛と同位体比とは全く異なっていた。当初、メダイとの関係から、ポルトガル船などによって運ばれたヨーロッパからの流入品とも考えたが、まもなく東南アジア、カンボジア出土の鉛製品にこの鉛があることを突き止めた。

そこで、私の登場である。文献歴史学者としてあらためて鉛の輸入に関する文献の発見が課題とされた。しかし、鉛の交易に関する研究を積極的に行ったものではなく、なかなか実態は解明できなかった。それでも、文献や論文を丹念に検討し直すと、鉄砲の玉として、ポルトガル商人、オランダ商人、イギリス商人が鉛を運んできたことが明瞭となった。特に、オランダ商人が、徳川家康に交易の許可を得るため、プレゼントとして金の杯や象牙や絹糸のほかに、鉛1トンほどを渡した記録があった。この鉛はマレー半島のパタニ港で積み込まれたものであり、東南アジア産の鉛であったことが推測できる。

また、岡 美穂子氏の研究によって、ポルトガル船、オランダ船、朱印船の貿易によってシャムから日本へ運ばれた品物に必ず鉛があることが明らかになった。

それでは、なぜ、日本では鉛が不足したのであろうか。それは、鉄砲使用による鉛玉の需要であるが、鉛は日本でも大量に得ることができる鉱物である。それが不足したのは当時、世界の3分の1にも及ぶ銀を生産していたことと関係する。灰吹き法という銀精錬には大量の鉛があったからである。日本の鉛の輸入と銀の輸出は密接に関係していたのである。

## 鉛同位体比から見た日本の中世戦国時代における南蛮船で運ばれた鉛材料

平尾 良光

1543年に鉄砲が日本へ導入された。当時の日本は戦国時代であり、群雄が割拠していた。新しい武器の導入が戦術を大きく変化させ、鉄砲を如何に利用できるかが日本の覇権を握る要素となった。また、対外貿易の支払のために銀が利用されたため、石見をはじめとする銀山の開発は急務であった。銀の精錬法として灰吹き法の導入が1533年であり、鉄砲とほぼ同時期である。

この2つの大きな事実に関する共通点は鉛である。鉄砲の弾丸として、鉛はどうしてもほしい材料であり、また灰吹き法で銀を溶出するために大量の鉛が必要であった。この鉛をどのように掌握するかは戦国大名の手腕であったろう。日本の鉛鉱山から産出される鉛量ではその消費量に足りなかった。そこで、日本産の鉛に加えて、中国産の鉛が利用された。しかしそれでも足りなかった。それを補ったのが南蛮人のもたらす鉛であった。おそらく、鉄砲と火薬と鉛をセットとして、日本へ売りつけたのであろう。代価は銀である。では南蛮人はどこから鉛を日本へ運んだのか。

ここで鉛がどこの産地であるかを示唆してくれるのが鉛同位体比法である。鉛に含まれる4つの同位体の混合比率は鉛の産地毎に異なる。それ故、この比率、すなわち鉛同位体比を調べることによって鉛の産地を推定できる。この方法を鉛同位体比法と称する。

この方法を応用して、熊本県北部の和水町にある田中城跡（1587年、秀吉軍に平定された一揆軍との戦場）から出土した鉛玉56個の同位体比を測定すると、日本産48%、中国産15%、そして38%が東アジア（中国、朝鮮半島、日本）ではない産地（N領域と仮称する）であることが判った。大分市の大友遺跡出土資料（1587年、島津により破壊された）でもこのN領域資料が見つかった。長崎県原城跡（1637年、幕府軍により平定された）から出土した鉄砲玉で15%、同じ場所から出土したキリスト教関連遺物にも15%程度N領域材料が見つかった。よく調べてみると、東大寺南大門の仁王像にもN領域と同じ鉛同位体比を示す鉛玉が打ち込まれていた。鉛同位体比が一致するこれらに共通する事実は年代がほぼ一致していることである。これらが南蛮貿易とどのように関連付けられるかが、問題点である。

## 銀と鉄砲とキリスト教

村井章介

16世紀には、スペイン・ポルトガルの貿易・植民活動によって、「ヨーロッパ世界経済」が史上初めて地球を一周する規模で成立したといわれる。ヨーロッパから見て「極東」に位置する日本列島にもその波は押し寄せた。ヨーロッパ勢力は、1526年の石見銀山の発見以後爆発的な増産をみた日本銀を買い求め、1542/43年に種子島に鉄砲を、1549年に鹿児島にキリスト教を伝えた。銀は、ほとんど唯一の輸出品として、戦国大名や豊臣・徳川政権（統一権力）の財政を支えた。鉄砲は、織田・徳川軍が武田軍を撃破した1575年の長篠の戦いに象徴されるように、戦国動乱の行方を左右する新兵器となった。キリスト教は、一時急激に教線を拡大したが、1587年以降、統一権力の禁令の対象となり、信者でないことを証明させる制度が、徳川政権に人民掌握の有効な手段を提供した。

このように、16世紀におけるヨーロッパとの出会いが、日本史の中世から近世への移行に大きな役割を演じたことは疑いない。しかし、それが日本人のなかに常識化される際に、なんの媒介もなくいきなりヨーロッパが出現したかのように、思いこまれてしまっていないか。ポルトガル人を含む多民族的な貿易商人が日本銀を運び出した先は、当時歴大な銀需要が発生していた中国だった。種子島に来たポルトガル人はシャムのアユタヤからの脱走者で、その乗船はのちに「倭寇王」となる中国人密貿易商王直のものだった。フランシスコ・ザビエルもまた、マラッカで鹿児島人アンジローと出会って日本のことを知り、「海賊」と仇名される中国人密貿易商の船で鹿児島に来たのだった。

16世紀のアジアにおいては、中国を渦の中心とする巨大なうねりが生じていた。中華王朝明が衰えて周縁の海域・陸域に諸勢力・諸民族の入り交じる星雲状態が生じ、ヨーロッパ人もその一角に参入した。やがて明の辺境から、後金（のち清）と日本の統一権力という、鍛えぬかれた軍事国家が出現し、豊富な財源をも獲得して明の征服をめざした。それは1644年に明清交代として実現する。徳川政権のブレン林家の造った「華夷変態」という語は、このできごとの世界史的意味を簡潔に表現している。

## 大航海時代のジェノヴァと日本

## -ポルトガル船への融資・投資事例分析を中心に-

岡美穂子

15世紀にはじまる大航海時代に関し、過大評価はすでに過去のものとなったとはいえ、各々の貿易圏内を中心に発展した交易ルートが地球上で1本の直線に結ばれたのがこの時代の世界史上の特徴であることは否定できない。

但し、ポルトガル人の交易活動の実態に関しては、王室独占のヨーロッパ=アジア間貿易ではなく、その後のオランダ、イギリス東インド会社同様、主力はアジア域内交易であったこと、国王が信任する役人的貿易業者のほか、のちのカントリー・トレーダーを思わせる私貿易海商たち、独自の商業ネットワークを世界規模で展開するセファルディ系商人たちといったバックグラウンドも人種も（混血化が早期から顕著なため）多種多様な「ポルトガル」商人たちが交錯して展開したものであることが近年の研究で明らかにされている。

このような大航海時代のポルトガル、スペインの商業活動を支えたのは、彼らが貿易活動で得る利益というよりはむしろ、レヴァント貿易から敗退したジェノヴァ商人が融資する莫大な資本であった。16世紀後半から17世紀初頭のスペイン・ポルトガル財政におけるジェノヴァ人の役割は顕著で、ヨーロッパ経済史上、「ジェノヴァ人の世紀」とも呼ばれる。ほぼ同時代に極東日本では石見銀山の開発等により銀の生産量が激増、「銀の世紀」と呼ばれる時代が展開し、16世紀の戦国大名間ではポルトガル人への銀委託が盛んとなった。さらに17世紀初頭の長崎では博多、堺、長崎の商人を中心に、ポルトガル船や朱印船、唐船への海上保険機能を付帯した投機的融資「投銀」が横行した。すなわちポルトガル人の貿易活動とは、洋の東西を問わず、本質的に投資によって成り立っていたと指摘できる。

近世日本の「投銀」がヨーロッパ起源のものであるか否かについては戦前から議論があるが、ポルトガル人の交易活動が根本的に投資を母体にしたものであること、とくにその中のジェノヴァ資本の重要性についての認識が欠けていたために、ヨーロッパの類似金融との関係性において十分な結論を出すには至らなかった。日本で最も早い段階に（1613）、この投機的融資を受けたことが明らかな人物は、奇しくもジェノヴァの豪商貴族スピーノラ家を出自とするイエズス会宣教師カルロ・スピーノラである。布教資金獲得のために貿易に深く関与した日本イエズス会の財務再建が目的であったはずだが、自身がスペイン財政に対する莫大な融資で知られるスピーノラ家出身でなければ、それを発案し効果的に運用するには至らなかったのではなかろうか。

ここでは、同時代のポルトガル人貿易に深く関係した東西の商業都市ジェノヴァと長崎（そこを窓口とした博多・堺も）を取り巻く環境を検討し、その比較にとどまらず、金融形態の伝播の可能性にも着目し、ユーラシアを行き交う諸事物の動きを明らかにしたい。

## 石見銀山の開発と東アジア-銀と鉛をめぐる-

仲野義文

日本では16世紀、石見銀山の開発を契機に、国内各地で銀山の開発が急激に始まる。こうした背景については従来、戦国大名の領国経営との関連で説明されることが多い。ところが、地球規模で見たとき、たとえば南米のポトシ銀山やサカテカス銀山の開発が何れも日本のそれと軌を一にすることを踏まえれば、日本における銀山開発もまた、このような世界的な潮流の中で起こった出来事と考えることができるのである。

本報告は、中世末から近世初期にかけて東アジア最大の銀鉱山であった石見銀山を取り上げ、開発に至る背景や生産、流通の問題を、東アジアの動向との関連から捉えようとするものである。たとえば、①石見銀山の開発者が貿易商人である博多の神屋寿禎であること、②1533年同銀山に導入された灰吹法が朝鮮人と倭人との密貿易によってもたらされたこと、③生産された銀が開発とともに直ちに中国・朝鮮に流入したなどは、その開発が東アジアの貿易やそれ拘わる人々の動きと密接に関係している証左と言えよう。したがって本報告では、このような中国・朝鮮の銀をめぐる動きを踏まえ、石見銀山開発の問題を考えてみることにしたい。

いまひとつ、この時期石見をはじめ各地で銀鉱山が開発され、日本は東アジア最大の銀の輸出国となったが、このことはまた別の金属需要をもたらした。すなわち「鉛」である。日本では16世紀以降、銀製錬法として「灰吹法」が用いられた。これは金銀と鉛の親和力を利用した方法で、金銀を含む鉱石に鉛を加えて合金とし、灰を詰めた炉によって銀と鉛に分離した。したがって、銀の生産を行うためには鉛は必要不可欠の存在であったのである。従来、鉛は鉄砲玉の原料として注目されることが多いが、当時最大の消費地は他ならぬ鉱山であった。当時鉛は国内で調達したほか、ポルトガルなどからの輸入も多く、本報告ではこのような鉱山と輸入鉛の問題についても考えてみることにしたい。

## 小シンポジウム Ⅲ

5月30日(日) 13:10 -16:30 別府大学 32号館 500番教室

## 趣旨説明

## ドイツ・フランス共通歴史教科書の射程

## ドイツ・フランス共通歴史教科書の射程

## 基調報告

ロルフ・ヴィッテンブローク (ザールラント大学)

パイロット・プロジェクトとしての独仏共通歴史教科書-教育モデルとしての移植可能性-

Rolf Wittenbrock (Universität des Saarlandes)

Das deutsch-französische Geschichtsbuch als didaktisches Pilotprojekt -  
Thesen zur Transferierbarkeit eines Modells

## 報告

松井 克行 (大阪府立三島高等学校)

日本の高校現場からみた『独仏共通教科書』-現地調査を踏まえた活用実践報告-

齋藤 一晴 (明治大学・兼)

東アジアからみた『独仏共通教科書』-東アジア共通歴史教材制作の現場から-

剣持 久木 (静岡県立大学)

歴史認識共有の実験としての独仏共通教科書

司会/通訳: 西山 暁義 (共立女子大学)・川喜田 敦子 (大阪大学)

2006年秋に独仏の教育現場に、史上初めて国境を越えた共通歴史教科書が導入された。全三巻で構成される教科書、第一巻(現代史)に続き、2008年には第二巻(近代史)が刊行され、2010年5月には第三巻(古代、中近世史)が出て完結する予定である。2008年12月には、第一巻の日本語版(明石書店)も出版されている。全欧州共通歴史教科書という、冷戦終結直後に刊行された『ヨーロッパの歴史』(東京書籍)が知られているが、実は、その高い理念とは裏腹に、教科書はおろか、副教材として使用される例も殆どない、象徴的書物に留まってしまったのが実態であった。今回の独仏教科書は、両国での正規の教科書であるという点が画期的である。

歴史問題が政治問題化している東アジアにおいては、「歴史認識共有の実験」としての独仏共通教科書には注目せざるをえない。本シンポジウムは、独仏共通教科書作成の当事者を基調報告者に迎え、共通教科書がわれわれ日本を含めた東アジアに提起する可能性や問題点などを議論することを目的としている。

独仏共通教科書を作成する際の指針を作成した、専門学術委員会のメンバーであり、長らく独仏ギムナジウム(リセ)の校長をつとめた、ロルフ・ヴィッテンブローク氏からの基調報告に引き続き、日本の高校教育現場からは、2009年8月に現地を視察した松井克行氏からの実践的なパネリスト報告、東アジア共通歴史教材『未来をひらく歴史』執筆メンバーの齋藤一晴氏からは、東アジアでの歴史認識問題との比較の立場からのパネリスト報告を、さらには、本シンポジウムを企画する(共通教科書の独仏両国の使用現場調査を実施した)科研共同研究の代表者の総括的コメントを交えた、パネルディスカッションを実施する。



## 基調報告

### パイロット・プロジェクトとしての独仏共通歴史教科書 —教育モデルとしての移植可能性—

Das deutsch-französische Geschichtsbuch als didaktisches  
Pilotprojekt – Thesen zur Transferierbarkeit eines Modells

ロルフ・ヴィッテンブローク (ザールラント大学)  
Rolf Wittenbrock (Universität des Saarlandes)

独仏教科書が他の地域に対して果たしてモデルたりうるのか、そうであるとするならばどのような点においてか、について考察することが本報告の目的である。まず共通教科書の成立を可能にした前提条件について確認した後、この教科書が有する歴史教育上の基本コンセプト、そして独仏両国におけるこれまでの反応を紹介する。さらに、現在準備されているドイツ・ポーランド共通歴史教科書にとって、独仏の先行事例がどの程度参照されているのかという点についても言及したい。併せて、これらいわば「トップダウン」(政府・政治)的に作成される共通教科書の強みと弱みについても、バルカン半島など他の多国間のプロジェクトや、歴史教育にかんするヨーロッパ規模のNGOであるEUROCLIOなど、市民社会の側の活動にもとづく事例と比較しつつ、検討する。そのうえで、今後同様の共通の歴史教科書を作る際、独仏の事例が示唆しうることとして、本報告は以下の論点を提起する。

まず、一般的前提条件として、有利な政治的、教育政策的状況が存在すること、そして関係者のネットワークのなかに全関係国からできるだけ多くの決定権を持つ者を取り込み、その中に、全関係国において権威と認められる人物や主導者を見出すこと、さらには「瞬時の好機window of opportunities」を逃さないということがある。

次に、専門的教育方法の観点からは、関係国の教育方法的立場が対話の土台として相互に尊重されること、関係者が、自国史的認識や解釈が唯一絶対の真実を示しているのだ、という主張をしないこと、すべての関係者が国際的な専門家の研究に照らして自らの立場を検証し、批判的に再考する用意があること、相異なる立場の歩み寄りを可能にするために、(自己)批判的な言説に取り組むこと、さらには、史実上の誤りやステレオタイプ、そしてそこから起因する自己・他者像を検証し、必要に応じて訂正するよう努めることが求められる。

歴史上の立場に関する一致点と相違点を確認したうえで、一致点に関する十分な土台の存在(共有された歴史shared history)が明らかとなれば、共通の歴史教科書は意味のある、実現可能なものになってくる。さらに、関係者はまた、共通の歴史教科書において相違する歴史的立場(交差する歴史—crossover history)も記述する用意がなければならない。なぜなら、相違する解釈が存在することを知らずして生徒にとって特別な関心の対象となりうるからである。

歴史教材というものは一方で国民間の相互信頼や国際理解に寄与しうるものであるが、他方でまた不信や紛争を強化するものにもなりうるということを自覚することが肝要である。

## 日本の高校現場からみた『独仏共通教科書』

### —現地調査を踏まえた活用実践報告—

松井 克行

報告者は、高校の地歴・公民科の教員として、『独仏共通歴史教科書』「現代編」の翻訳版(明石書店, 2008)に出会い、かつての敵国同士であった独仏両国が、高校生の提案を下に政府レベルで協働し、共通歴史教科書を作成した事実を驚嘆し、かつ内容構成の斬新さ(特に、「第2章 第二次世界大戦の記憶」で顕著であるのが、独仏双方の視点からアプローチする点や、過去を批判的に再検討する視点だけではなく、過去への反省ばかりではうんざりするという意見、さらに過去を美化する「歴史修正主義」についての資料を紹介し、生徒が多角的な視野から歴史を解釈することを可能とする点)に感銘を受けた。

そこで、昨年7~8月、公文国際奨学財団より研修費を受け、独仏を訪問し、授業見学や「教科書作成専門家委員会」委員の方々、そして編著者の1人(ギョーム・ル・カントレック氏)と面談する機会を得た。

報告では、現地調査報告と共に、帰国後、『独仏共通歴史教科書』翻訳版を用いた、ささやかな授業実践に関する報告を行う予定である。

東アジアからみた『独仏共通教科書』  
-東アジア共通歴史教材制作の現場から-

齋藤 一晴

2005年以降、日本と韓国の二国間、もしくは日本と中国、韓国の三国間で作成された共通歴史教材が刊行されている。いずれも過去の日本の侵略戦争をめぐる和解と歴史事実の共有、そして相互理解と尊重を基礎とした新たな東アジア史像の模索を行っている。

報告者は日中韓共同編集・同時刊行された『未来をひらく歴史』(高文研、2005)の作成者の一人として、東アジアにおける共通歴史教材作成の現状と課題を指摘しながら、それが持つ歴史的意義について、歴史認識の共有や歴史像の構築といった視点から言及する予定である。

また東アジアにおける共通歴史教材の作成とヨーロッパにおける取り組みを比較・検討しながら、それぞれの特徴や異同を分析し、共通歴史教材の作成という歴史対話が、どのような思想的いとなみであるのか考えてみたいと思う。そして日本の歴史研究・歴史教育・歴史叙述を自己点検・自己更新していく手がかりを提起してみたい。

歴史認識共有の実験としての独仏共通教科書

剣持 久木

独仏教科書対話の歴史は両大戦間期に遡る。1930年代はじめに、東の間の和解が風前の灯火となった時期に両国は、共通教科書構想(『独仏関係史ハンドブック』)を提起し、そして教科書相互改善勧告まで準備したのである。いずれも実現には至らなかったが、第二次大戦後の対話再開の礎となっている。ただ、改善勧告の方は1950年代に早くも実現したが、共通教科書の実現にはさらに半世紀を要している。東アジアの状況との比較という点、ともすれば、戦後西ドイツの徹底した過去克服をモデルに捉えがちであるが、独仏の和解、そして歴史認識共有過程は、第一次大戦後から始まっていることに注意すべきである。この過程は、共通教科書だけでなく、国境を越えた戦争博物館(Historial de la Grande Guerre, Péronne)さらには、『第一大戦仏独共同通史』(Jean-Jacques Becker, Gerd Krumeich)にまで至る、両国歴史家の長年の交流の過程でもある。共通教科書の実現を、歴史認識共有の一段階としてみるならば、歴史和解政策を実践する政治家のリーダーシップと、国民同士の和解をすすめる市民社会のイニシアチブの結節点に存在する、この歴史家同士の交流にも注目すべきであろう。

## 小シンポジウム IV

5月30日(日) 13:10 -16:30 別府大学 32号館 400番教室

### グローバル化とグローバル・ヒストリー

#### —研究と教育の国際比較を中心に—

### Global History under Globalisation: Current Issues in Research and Education

#### 第1部 グローバル・ヒストリー教育と研究の現状と課題

Part I. Current Issues of Global History Education and Research in the Multinational World

講演:

パトリック・マニング (ピッツバーグ大学)

グローバル・ヒストリーは国家の枠をどう超えるか

—その教育・研究の現状と展望—

Patrick Manning (University of Pittsburgh)

Teaching and Researching Global History in a World of Nations

通訳: 岡本 哲明 (日本文理大学)

Interpreter: Okamoto Tetsuaki (Nihon Bunri University)

#### 第2部 ポストコロニアルな教室で歴史を教える／学ぶ

—イギリスと日本の例を中心に—

Part II. Teaching Colonial and Postcolonial Reality in a Multinational Environment: The Cases of Japan and the United Kingdom

藤田 加代子 (立命館アジア太平洋大学)

『グローバル化』するアジア太平洋地域の大学とグローバル・ヒストリー教育

Fujita Kayoko (Ritsumeikan Asia Pacific University)

Teaching Histories of Globalisation in the Post-Colonial Asia Pacific Region

アナ・クレイドン (レスター大学)

コロニアル・ヒストリーとイギリス高等教育の現状

—教育とカリキュラムへの歴史の影響に対する認識に関する調査結果から—

Anna Claydon (University of Leicester)

Perceptions of the Influence of the History in Current UK Higher Education Teaching and Curriculum

ピーター・マンテロ (立命館アジア太平洋大学)

不死なる現在

—記憶なきグローバル化の時代に学生たちは歴史をどう捉えるか—

Peter Mantello (Ritsumeikan Asia Pacific University)

The Immortality of the Now: Teaching a Global History without Memory

井口 由布 (立命館アジア太平洋大学)

グローバル化とジェンダー研究・教育

—教育実践を通じた西洋国民国家中心主義的ジェンダー論の問い直し—

Iguchi Yufu (Ritsumeikan Asia Pacific University)

Globalization and the Teaching of Gender Studies: Questioning the Western-nation-State Oriented Gender Studies through Educational Practices

コメンテーター: パトリック・マニング (ピッツバーグ大学)

Commentator: Patrick Manning (University of Pittsburgh)

## 趣旨説明

## グローバル化とグローバル・ヒストリー：研究と教育の国際比較を中心に

近年、アジア太平洋地域およびヨーロッパの各国で、留学生を自国の大学に呼び込もうとする動きが盛んになっている。出生率低下による学生数の減少や潜在的な労働力の確保、英語による教育への需要の高まりなど受け手・送り手双方の側で原因は様々であるが、結果として高等教育の「開放」「国際化」はもはや押しとどめ難い。しかし過去の教科書問題でも明らかのように、一国史の枠組みに過度にとらわれた歴史教育は、他国との政治的紛争さえ引き起こし得る。では、ひとつの教室に異なる文化的背景をもった若い学生たちが集まったとしたら、歴史・社会に関する講義の方法や内容は均質な空間でのそれと比べて、どう変わるだろうか。またどう変えるべきなのだろうか。

本シンポジウムは二部形式を取る。第一部では、アメリカにおける世界史(World History) 教育と研究のパイオニアであるマニングが、Pitt World History Centerでの近年の共同研究の成果などにもとづき、グローバル・ヒストリー(Global History) の教育と研究の現状と課題について、アメリカとその他の各国での例を提示する30分の講演(英語)をおこなう。高校教員や将来の歴史教育・研究を担う学生・院生との積極的な意見交換のため、講演とディスカッションでは岡本が日本語への通訳をおこなう。第二部では、若手大学教員四名がメディア(Claydon)、ニューメディア(Mantello)、カルチュラル・スタディーズ(井口)、歴史学(藤田)の視点から、多民族・多言語・多文化な環境でのグローバル・ヒストリー教育(グローバルな過去とその帰結としての現代グローバル社会の両方を対象とする)の方法論と実践について、理論的考察および学部レベルの授業経験にもとづいて報告する。各報告の中心となるのは、西洋中心主義的な、あるいは近代国民国家の枠組みに基づいた歴史理解・教育方法が、グローバル・ヒストリーの教育と研究に与えている影響、およびそれらを教育・研究の現場でどう克服していくかという課題である。報告・ディスカッションとも英語で実施する。最後にマニングがそれぞれの報告へのコメントと小シンポジウム全体の総合討論の論点提出をおこなう。

グローバル・ヒストリーは国家の枠をどう超えるか  
—その教育・研究の現状と展望—

Teaching and Researching Global History in a World of Nations

パトリック・マニング

Patrick Manning

グローバル化の進展は、教員と研究者にとって、自分の仕事をグローバルな文脈で意味付けする必要性をもたらした。また、より広く社会にとっては、グローバルであると同時にローカルであるような未来像を構築する必要性が生まれた。しかしグローバルな未来への展望は、グローバルな過去の知識なしには机上の空論に終わる。幸いなことに、グローバルなレベルでの歴史の研究・分析は、様々な分野で発展しつつある。本講演は、グローバル・ヒストリーを学び教える上での諸々の制約と、それら乗り越えるためのアプローチに焦点を当てる。

グローバル・ヒストリーの教育と研究が直面する根本的な問題は、近代国民国家がもたらす壁である。政治・社会・文化の諸相における国家の存在の大きさは、グローバルなレベルの研究と教育にいろいろな形で分断と制約を与えている。たとえば、歴史やその他の科目の教育では、自国の経験がもっとも強調される。同時に、他の国々については国別に教えられるため、学校教育のなかでグローバルな交流について勉強する機会がひじょうに少ない。また研究においては、研究費の査定に当たって一国史が最優先されるため、グローバルな歴史のパターンを分析するための、より複雑で、しばしば学際的なプロジェクトは、めったに日の目を見ない。そもそも国家というものが近年の現象であるから一現代国家の多くは誕生から二世紀を超えない—歴史研究はその時間枠に縛られ、グローバルな人類の発展における重要な長期のパターンはほとんど注目されない。いくつかの国々では、独自にして不変な民族的伝統を強調するナショナリスティックな歴史観が、グローバルな学問を妨げている。

国家がもたらすこうした制約にも関わらず、グローバル・ヒストリーの教育と研究は進展し続けている。熱意ある教師たちは、グローバルな問題について勉強する機会を教室に持ち込む術を見出した。研究者の間では、アメリカ各地域や全米レベルのグローバル・ヒストリーの研究団体が設立され、現在ではグローバルな世界史家の組織が立ち上がりつつある。教育者の間では、各国の状況の比較が活発な議論を呼んでいる。2009年5月に大阪で開催されたアジア世界史学会では中国・日本・韓国でのグローバル・ヒストリー教育を比較するセッションが開かれたが、そこでは国ごとの教育の現状の比較に対して広範な関心が寄せられた。またアメリカ合衆国などの高校において英語で教えられているアドバンスト・プレースメント・プログラムの世界史(World History) コースは、世界史のカリキュラムの拡大に大いに貢献した。

こうした発展は、今後グローバル・ヒストリーの研究と教育を前進させるための二つの道を明らかにしている。研究面では、世界中の研究者の連携を上げることが最重要である。教育面では、カリキュラムや教育をめぐる状況は国によって非常に異なるものの、グローバル・ヒストリー教育のあれこれを比較することには高い関心が寄せられている。幸いにも、さまざまなレベルで発展してきたグローバル・ヒストリーに携わる人々の組織が、国際的な交流を必要とするこれら二つのアプローチを実現するための土台になることだろう。

『グローバル化』するアジア太平洋地域の大学と  
グローバル・ヒストリー教育  
Teaching Histories of Globalisation  
in the Post-Colonial Asia Pacific Region

藤田 加代子  
Fujita Kayoko

日本の国際化拠点整備事業（グローバル30）を例にとるまでもなく、いまアジア太平洋地域の各国で高等教育の国際競争力強化が強く叫ばれている。それは現場の教員にとってみれば、国内外からの学生にどれだけ魅力的な内容とコストに見合った水準の教育を提供できるかという問題に直結する。同時に学生たちは、いまだ誰も完成形を知らないグローバル社会の一市民（の卵）として、多文化・多言語な教育・生活環境で国籍の異なる他の学生や教員に向き合わなければならない。

彼ら学生にとって、国家を分析単位とする歴史記述を乗り越えようとするグローバル・ヒストリーは、間違いなく魅力的な学問領域である。しかし実際には、大学入学以前に受けた教育（例：「一國史」としての出身国の歴史、「人種」・「民族」などの概念、植民地化・脱植民地化の理解）が、彼らが新しい歴史学の成果を理解するのに様々な形で制約を与えている。また大学や教員の側では、国際学生受け入れの比較的長い実績があるイギリス（Claydon 報告を参照）などに比べて、基本的な教育技術や情報の蓄積に乏しいことも多い。

本報告の目的は、大学教育で市民権を得つつある新科目グローバル・ヒストリーが実り多い学びの機会となるために必要な事柄や克服すべき問題点を、報告者の観察にもとづいて整理し、よりよい教育実践をめざす議論をひらくことである。報告では、第一に、日本を含むアジア太平洋地域で活発化する高等教育機関への国際学生の誘致について、各国の現状を概観する。第二に、日本における「国際化した高等教育」のパイロットケースである報告者の勤務校について、全学の教育システムやカリキュラムとともに、歴史教育のあり方を紹介する。特に、報告者が2007年度から担当してきたグローバル・ヒストリー関連科目（グローバリゼーション・スタディーズとポストコロニアル・スタディーズを含む）のコース内容を具体的に説明する。第三に、コースで扱ったトピックの中から1970年代以降のグローバル・ヒストリー研究の潮流を取り上げ、主要な論者の著作について、ヨーロッパとアジアの位置づけとその相互交流の変遷を中心にまとめる。第四に、それらのテキストや講義内容に対し学生たちがどのように反応したかを、授業中のディスカッションや授業へのコメント、筆記試験での記述などから分析する。そのうえで、21世紀の多文化・多言語・多国籍な高等教育機関におけるグローバル・ヒストリーの学習は、若い学生たちにとってどのような意義を持つのか、たとえば新しいグローバルなアイデンティティ形成に結びつくのか、という問題を考察したい。

コロニアル・ヒストリーとイギリス高等教育の現状  
—教育とカリキュラムへの歴史の影響に対する認識に関する調査結果から—  
Perceptions of the influence of the history in current UK higher education  
teaching and curriculum

アナ・クレイドン  
Anna Claydon

本報告は、イギリスの高等教育における教育とカリキュラムに対する植民地主義の影響がどのように捉えられているかに関する2008～2009年に実施した試験的な研究（2010年3月刊行のアジア世界史学会第一回国際会議の報告集に収録）をさらに発展させたものである。報告者はさまざまな地理的・社会的背景を持ついくつかの大学を対象として小規模な予備的調査をおこなった。その結果、カリキュラムと授業がどの程度学生に適しているかについて、学生と教員の認識には非常に大きな違いがあること、また学生の中でも海外からの留学生（ほとんどのイギリスの大学で大学院生の多数を占める）と国内学生（イギリス市民）とでは認識に差があることが明らかになった。しかし、最初の調査では科学者の回答が多かったため、その結果には科学の言語という本質的な普遍性を共有する広い学問領域での意見が多く反映された。もう一つの問題点は、院生が学部生よりも多く、教員は若手が中心である、という回答者層の偏りであった。

報告者は、2009年末～2010年初頭にかけて再度調査を実施し、前回よりも広い層のイギリス高等教育機関所属の教員・学生から回答を得た。本報告では、その結果をもとに、予備調査で明らかになった上記の二つの違いをより詳細に分析する。また国際学生の流入が単にカリキュラムを変化させるだけでなく、より広くイギリスの高等教育制度そのものを帝國的な教育モデルからもっとコスモポリタンな時代にふさわしいものへ脱皮させるインパクトを持っていることを論じる。今回の調査の鍵は、より多くの国際学生がイギリスの教育制度に参入するようになった結果として最も大きな変化を被った学問領域である人文学と社会科学（そこで使われる言語は理論科学・自然科学とはまったく異なる）から多くの回答を得たため、より学問分野のバランスが取れたことである。もう一点の鍵は、学部生と、年齢層の高い教員の回答数が増えたことである。後者は、イギリス教育制度の変化をより長い期間にわたって経験し、大学院での国内学生と国際学生の比率が事実上逆転するのを実際に見てきている。

しかし、この研究プロジェクトは、より広い射程をもつ。本研究には、カリキュラムの改善に貢献し、かつ社会の歴史があらゆる学問領域にどれほど影響しているかということに大学教員らがよりよく理解するのを助けるねらいがある。イギリス高等教育機関には、いくつかの特定の国々から国際学生が大学に（その多くは、グローバル社会におけるイギリスの歴史的な位置付けのためと、イギリスを将来のキャリアのためのアメリカへの架け橋とみなすがために）押し寄せており、大学教員の側では彼らを扱うのに慣れていない、という共通した懸念がある。本研究は、それがいったいどの程度真実なのか、どれくらい教育の質とカリキュラムに影響しているのか、さらに国内から得られる資金が不十分なためイギリスの高等教育機関が危険なまでに国際学生に依存しているのではないかと、という点を評価しようという、より大きな問題関心の一部なのである。

## 不死なる現在

—記憶なきグローバル化の時代に学生たちは歴史をどう捉えるか—

The immortality of the now:

Teaching a global history without memory

ピーター・マンテロ

Peter Mantello

オクタヴィオ・パズ「未来に生きられないように、この瞬間に生きることも不可能だ」

グローバル・ヒストリーの人類学は、リアルタイムに基づくポストモダンな世界に住む学生たちにとって、ますます理解不能なものになりつつある。グローバル・ヒストリーの近代的な理解、つまり地球規模でひろがる地理的なまとまりの内に長期の時間が継続するという考え方は、瞬間の歴史と空間の消失に取って代わられた。時空の連続として定義される神聖なる「できごと」は、地球のあらゆる場所へのイメージの同時的かつ同期的な拡散へと替わった。その深みをほとんど持たないイメージは、現在という時間の自己完結性を示している。

このグローバル・ヒストリーの加速化と物理的空間の縮小は、市民と国家の間の区別を、単に私的空間と公的空間のあいだで推移する時間の様相へと変質させる。パズのいう瞬間が発生する速力と頻度は、国家なき存在の経済的・戦略的・政治的なアジェンダに合うように、大きな情報のベクトルによって枠付けされ、包装される。世界中の小さな国家がこうした主要な情報の経路に依存を深めることで、文化的に独自の視点やあるいは対照的な物語を持つかもしれない自立したローカルなベクトルの存続と生存が失われる。

本報告は、ポール・ヴィリリオとマッケンジー・ワークの理論的研究を参照し、様々な時代のグローバルなできごとの軌跡についての事例研究を利用しつつ、過去と未来という概念が、どのように死ぬことのない現在に取って代わられたのかを検証する。空間の縮小、事象の速度と、その浸透の経路は、私たちの学生がグローバル・ヒストリーを理解する方法を大きく変えた。不死なる現在は、過去の必要性和記憶への願望を押さえ込み、それらに取って代わるのである。

## グローバル化とジェンダー研究・教育

—教育実践を通じた西洋国民国家中心主義的ジェンダー論の問い直し—

Globalization and the teaching of gender studies:

Questioning the Western-nation-state oriented gender studies  
through educational practices

井口 由布

Iguchi Yufu

本報告の目的は、グローバル化の歴史的な過程の中でジェンダーがどう位置づけられてきたかを、報告者が2008年度と2009年度に日英両言語で教えたジェンダー論コースの教育実践からさぐることである。

本報告は、世界的な性別役割分業の構造について講義した際の、学生たちの不可解な反応をきっかけにしている。「資本主義とジェンダー」という講義において、性別役割分業が一つの国家の内部で完結するのではなく、先進工業国と発展途上国を含む世界システムの不平等交換関係の中にあることを論じた。授業中、学生たちの多くはとまどいの表情を見せ、試験における回答からみても理解が不十分なことは明らかだった。これは、開講言語（日本語／英語）や学生の出身国（先進工業国／開発途上国）を問わず観察された。

なぜ学生たちは世界的な文脈の中でジェンダー問題を理解できないのか。この疑問に対し、報告者は一つの仮説を提示したい。社会科学における西欧国民国家中心モデルが、グローバル化の歴史的過程において、様々な国と地域での中等教育の前提となり、それが大学入学以前に学生たちの社会科学的な認識の基盤を形成しているのではないかと。つまり、近代的な社会科学諸分野が19世紀以降に西欧国民国家の事例を普遍的なモデルとして形成され、そのモデルに基づいた社会科学の訓練が、非西欧地域を含めた世界の中等教育の認識方法に強力に作用しているのではないかと。

本報告は、四つの部分から構成される。第一に、ジェンダー論のコース概要（受講者数、シラバス、教科書）をまとめる。第二に「資本主義とジェンダー」というトピックについて研究史を整理する。第三にそのトピックについて、報告者がどのような講義を行ったかを具体的に説明する。第四に、その講義内容を学生たちがどのように理解し／理解しなかったかを、授業中のコメント、宿題、試験における回答から分析する。そのうえで、ジェンダー論を世界的な文脈から理解するために研究・教育において何が欠けており、多文化・多国籍な21世紀の高等教育の現場でジェンダー論が何をめざすべきなのかを考察したい。

ジェンダー論研究における西洋国民国家中心主義を問い直すことは、教育現場における学生たちの認識を問い直すことになるだろう。同時に、教育現場における西洋国民国家中心的な認識方法を批判的に問い直す作業の継続が、研究における暗黙の西洋国民国家中心主義への批判的介入にもつながるだろう。このことが、教育と研究の往還の作業のなかで報告者がめざすものである。



## American Department Store and Mail Order Catalogues, 1870-1940

1870年から1940年にかけての、アメリカのデパートや通販会社が制作した商品カタログを復刻  
各年代のカタログを集成、時代の流れを通覧できる構成。  
アメリカ消費文化・経済史・流通史・生活文化を具体的に示す現存貴重なコレクション

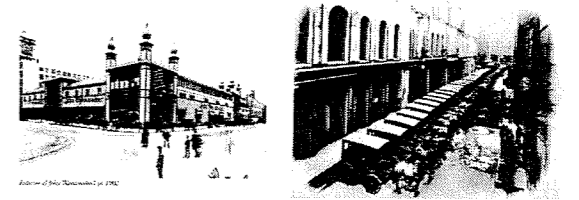
### Part 1: Department Store Catalogues, 1870-1915, Vols 1-6

【南北戦争後から第一次世界大戦前】

ISBN 978-4-86340-061-0 ・ c. 2300 pp. ・ 全6巻セット予価 (本体 152,000 円+税)

1920年以降はほとんど見られなくなる、各地有名デパートの通販カタログ。アメリカにおける通販事業の再初期の状況を具体的に示す希少な資料。

- Volume 1: Macy 1874 / Montgomery Ward 1876
- Volume 2: Wanamaker 1887
- Volume 3: Marshall Field 1889
- Volume 4: Wanamaker 1893 / Wanamaker 1895
- Volume 5: Wanamaker 1902 / Wanamaker 1905
- Volume 6: Macy 1910-1911



続刊予定...

Part 2: 戦間期前半、第一次世界大戦後から1920年代後半まで

Part 3: 戦間期後半、世界恐慌後の1930年代

好評既刊.....

### Negro Year Book: An Annual Encyclopedia of the Negro 【黒人年鑑：事実の記録 1913-1952】

Edited by Monroe N. Work

別冊解説: 大森一輝 (都留文科大学教授)

人種差別に反対する運動に事実という根拠を提供した、黒人の様々な社会活動や生活状況を丁寧に調査、記録した貴重な資料。黒人のさまざまな社会活動や生活状況などの動向を細かく調査、記録。

Part 1, Vols 1-4 (1913, 1918-19, 1921-22, 1925-26)

ISBN 978-4-86340-034-4 ・ 1972 pp. ・ 全4巻セット定価 (本体 84,000 円+税)

Part 2, Vols 5-8 (1931-32, 1937-38, 1947, 1952) 2010年9月刊行予定

ISBN 978-4-86340-035-1 ・ 2322 pp. ・ 全4巻 (別冊解説付き) セット予価 (本体 95,000 円+税)

### Harmsworth's Household Encyclopedia

【20世紀イギリス家庭生活百科事典】

別冊解説: 菅 靖子 (津田塾大学准教授)

20世紀初期の家庭、住まいに対する関心に対応した実用的かつ具体的な百科事典。図版15,000点を使用。

全12巻 (別冊解説付き) ISBN 978-4-86340-030-6 ・ 5456 pp. ・ 7 col. pl. ・ セット定価 (本体 285,000 円+税) 分売可

Part 1: Vols 1-4 (A-F) ・ ISBN 978-4-86340-031-3 ・ 分売定価 (本体95,000 円+税)

Part 2: Vols 5-8 (G-Q) ・ ISBN 978-4-86340-032-0 ・ 分売定価 (本体95,000 円+税)

Part 3: Vols 9-12 (R-Z) ・ ISBN 978-4-86340-033-7 ・ 分売定価 (本体95,000 円+税)

Athena Press

株式会社 アティーナ・プレス



〒112-0011 東京都文京区千石4-33-18

TEL. 03-3946-2117 FAX 03-5977-8026

www.athena-press.co.jp

eigyo@athena-press.co.jp



## アテナイの前411年の寡頭派政変と民主政

テラメネスの政治行動に焦点をあてて古代民主政期アテナイの前411年の400人の寡頭派政変と5000人政権を事件後約80年を経たアリストテレスの記述から再検討、再解釈を試みる。堀井健一著 / 8,400円

## イスラエルのアラブ人キリスト教徒 その社会とアイデンティティ

アラブ人市民であるメルキト派カトリック信徒について、ガリラヤ地方での2年余の調査と歴史的、社会的、宗教的背景から考察。アイデンティティの形成と様相を研究する。【学術振興会助成】菅瀬晶子著 / 3,990円

## 紀元前四世紀ギリシア世界における傭兵の研究

【2010年夏ごろ刊行予定】  
小河浩著 / 5,250円 (予備)

## 大航海時代における異文化理解と他者認識

柴田秀藤 / 5,250円

## スペイン・中南米関係文献目録

坂東省次 / 8,971円

## リチャード三世研究

尾野比左夫 / 5,250円

## 最新刊 伊藤伸幸著 / 6,300円

## メソアメリカ先古典期文化の研究

建造物・石彫・生業・権力と信仰から先古典期文化の特徴を解明。先古典期文化を構成している集落や都市に暮らす人々の姿をうし出す。メソアメリカ先古典期文化研究と方法 / メソアメリカ先古典期の建造物 / メソアメリカ先古典期における生業 / メソアメリカ先古典期における権力と信仰 / メソアメリカ先古典期文化の特徴

## 中世ヨーロッパにおける伝統と刷新

水田英実・山代宏道・中尾佳行・地村彰之・原野昇

中世ヨーロッパにおける「伝統」とその「刷新」を文学・歴史・語学において論究。200頁・2,100円  
【目次】中世キリスト教思想にみる伝統と刷新 / 中世イングランドにおける伝統と刷新 / フランス中世文学にみる伝統と刷新 / 「トバス卿の話」に見る伝統と刷新 / 古期英語の伝統と刷新



|                  |               |
|------------------|---------------|
| 中世ヨーロッパにおける笑い    | 186頁・2,100円   |
| 中世ヨーロッパにおける女と男   | 186頁・2,100円   |
| 中世ヨーロッパにおける死と生   | 202頁・2,100円   |
| 中世ヨーロッパにおける排除と寛容 | 184頁・2,100円   |
| 中世ヨーロッパの時空間移動    | 216頁・2,310円   |
| 中世ヨーロッパにおける多元性   | 178頁・2,100円   |
| 中世ヨーロッパに見る異文化接触  | (220頁)・2,625円 |

【表示価格税込】※ご注文は最寄の書店または直接弊社へお願いいたします。【目録進呈】  
書籍の詳しい情報はホームページで  
http://www.keisui.co.jp

- 16世紀イングランド行政史研究 井内太郎著
- ヘンリー・ヴォーン詩集 吉中孝志訳・注
- フランス中世の文学 原野昇著
- アッティカの碑文文化 前野弘志著
- レザー・シャー独裁と国際関係 吉村慎太郎著
- SIPRI年鑑 2006 小川恒男著
- 「近代」前夜の詩人黄遵憲 樋口昌幸著
- 英語の冠詞 樋口昌幸著
- 黎初ヴェトナムの政治と社会 八尾隆生著
- 近代日本社会史研究序説 布川弘著
- 日本経済の構造変化と長期推移の経済分析 市橋勝著
- 離婚紛争の法社会学 小谷朋弘著
- 今中文庫 近代今中家と広島藩 広島大学図書館研究開発室編

〒739-8512 東広島市鏡山1-2-2  
TEL082-424-6200 FAX082-424-6211  
広島大学出版会  
お求めは: amazon.co.jp 広島大学生協 紀伊国屋書店広島店 ジュンク堂書店広島店

世界の教科書シリーズ23

# ドイツ・フランス 共通歴史教科書

1945年以後のヨーロッパと世界  
ベーター・ガイ、ギヨーム・ル・カントレック 監修  
福井憲彦、近藤孝弘 監訳  
◎定価5040円(本体4800円+税)  
A4判変型/並製/348頁

独仏両国によって構成された執筆陣が、長い対立の歴史をもつ両社会間の理解・接近・和解への努力を結集して編纂した高校生向け共通歴史教科書。両国の現行の教育課程に沿いつつ、それぞれの歴史観を併記することによって異なる観点を学び合う画期的教材。

# 東アジアの歴史 その構築

ラインハルト・ツェルナー 著  
小倉欣一、李成市 監修 植原久美子 訳  
◎定価2940円(本体2800円+税) 四六判/上製/336頁  
中国・朝鮮・ベトナム・日本、漢字文化や稲作を共有する東アジア地域の歴史を概観。ヨーロッパ史のアレゴリーという理解から東アジア史を解放し、独自の時代区分を設定して歴史的特徴をつかみ取る。斬新な視点からとらえなおされた画期的な通史。

〒101-0021 東京都千代田区外神田6-9-5  
TEL 03-5818-1171 FAX 03-5818-1174  
http://www.akashi.co.jp

## 歴史認識共有の地平

独仏共通教科書と日中韓の試み  
剣持久木、小宮信子、リオネル・バビッチ 編著  
◎定価3360円(本体3200円+税)

## バルカン史と歴史教育

「地域史」とアイデンティティの再構築  
柴宜弘 編  
◎定価5040円(本体4800円+税)

## スイスの歴史

世界の教科書シリーズ27  
スイス高校現代史教科書(中立国とナチズム)  
バルバラ・ボンハーグ、ベーター・ガウチ、ヤン・ホーデル、グレーゴル・シュペラー 著 スイス文学研究会 訳  
◎定価3990円(本体3800円+税)

## スペイン内戦

包囲された共和国1936-1939  
ポール・フレストン 著 宮下彌夫 訳  
◎定価5250円(本体5000円+税)

## ヨーロッパ・ロシア・アメリカのディアスポラ

養書グローバル・ディアスポラ4  
駒井洋 監修 駒井洋、江成幸 編著  
◎定価5250円(本体5000円+税)

## 南アフリカの歴史【最新版】

レナード・トンブソン 著  
宮本正典、吉國恒雄、葦陽一、鶴見直城 訳  
◎定価9030円(本体8600円+税)

◎二〇一〇年新刊

# 日本占領下の「上海ユダヤ人ゲットー」

「避難」と「監視」の狭間で  
A5上製 二六四頁 五〇四〇円  
関根真保 著

日本軍はなぜ2万人ものユダヤ避難民をここに閉じ込めたのか。当時の上海ユダヤ人新聞や日本の反ユダヤ雑誌などの史料を駆使して「上海ゲットー」の謎を追及する。

# 識字と読書

リテラシーの比較社会史  
松塚俊三・八坂友広 編 A5上製 二六八頁 四四二〇円  
人類は口承文化と文字文化が織り成す豊かな世界を生み出してきた。「識字と読書」研究が問うのは、人々が求めるよりよき「生」に関わる知である。

# ドイツ・エコロジー政党の誕生

「六八年運動」から緑の党へ  
A5上製 二五八頁 三九九〇円  
西田慎 著

世界で燃え盛った「六八年運動」は何をもたらしたのか。ドイツ「六八年運動」の成果、緑の党の結成過程を追い、日本の「全共闘」闘争と比較する。

# ドイツの民衆文化

祭り・巡礼・居酒屋  
下田淳 著 四六並製 二七二頁 四二二五円

ドイツの多様性を持つ伝統的民衆文化の本質とその変容、その結果としての近代社会の意識を問う。

# 夢想のなかのビザンティウム

中世西欧の「他者」認識  
A5上製 三三六頁 四二〇〇円  
根津由幸 著

「アーサー王伝説」…人々を魅了するヨーロッパ中世の騎士物語。物語の細部に散りばめられたヒントを手がかりに、中世に生きた人々の心や社会が見えてくる。

◎既刊

- 私立学校からみる近代フランス 19世紀リヨンのエリート教育 前田重子 著 四一〇〇円
- ホロコーストと国家の陥穽 フタバベスト発「黄金列車」のゆくえ ロナルド・ツヴァイク 著 寺尾信昭 訳 三四八〇円
- 水と文明 制御と共存の新たな視点 秋道智博 編 二二四〇円
- 近代イギリスと公共圏 大野誠 編 四一〇〇円
- 拡大するEUとバルト経済圏の胎動 新書 藤原 編 四二〇〇円
- 近代日本外交とアジア太平洋秩序 酒井二巨 著 四九三〇円
- 階級政治! 日本の政治的危機はいかにして生まれたか 渡辺雅男 著 一五二〇円
- 政治理論とフェミニズムの間 国家・社会・家族 田村浩樹 著 三三〇〇円

〒606-8224 京都市左京区北白川京大農学部前  
TEL 075-706-8818 FAX 075-706-8878

昭和堂 郵便振替 01060-5-9347 \*定価は税5%込み価格  
http://www.kyoto-gakujutsu.co.jp/showado/

# CLIO

VOL.24

アイリン・ポンスカヤ (佐藤昇訳) 「共通聖域と他所 (よそ) の神々  
—ヘロドトス 8 巻 144 節における「共通」の意味に関する覚書—

内田康太 「共和制末期ローマにおける上位公職選挙の性格—『選挙運動備忘録』を中心に—

伊藤正彦 「18 世紀初頭フランスにおける私商人の東インド貿易参入  
—サン=マロ商人への貿易特権の委譲をめぐる—

小山内孝夫 「中世後期・近世ヨークシャ毛織物工業史の再検討—リーズとヨークの事例より—

オリヴィエ・サンフィリッポ (田瀬望訳)  
「フランソワ・カロン、ヨーロッパと日本の仲介者—国際外交における社交網の重要性—」

欧州文書館事情

定価 1,000円

クリオの会

〒113-0033 東京都文京区 7-3-1 東京大学大学院人文社会系研究科  
西洋史学研究室内 Tel:(03)5841-3789 Email:clionokai@gmail.com

■ プロフェッショナルのためのインターネット書店 ■

## BookWeb Pro

## 紀伊國屋書店

BookWeb Pro でご注文頂くと、

### Web 販売価格で洋書が格安にお求め頂けます！

お支払方法は、請求書決済でOK！  
公費での書籍購入をご検討の際には、  
ぜひ **BookWeb Pro** をご利用ください！

**BookWeb Pro** は

- ◆送料無料 (勤務先納品)！
- ◆公費請求書での決済が可能！
- ◆ドイツ書・フランス書も充実！
- ◆洋古書 (品切絶版) 発注 OK！
- ◆重複発注にはアラーム！
- ◆外商営業部門によるサポート！

<価格の一例>

ステップ遊牧帝国と中世ブルガール人

The Bulgars and the Steppe Empire in the Early Middle Ages

ISBN: 9789004180017

Web 販売価格: **¥12,108** (税込) 標準価格: **¥15,233** (税込) 2010 年 4 月現在の価格です

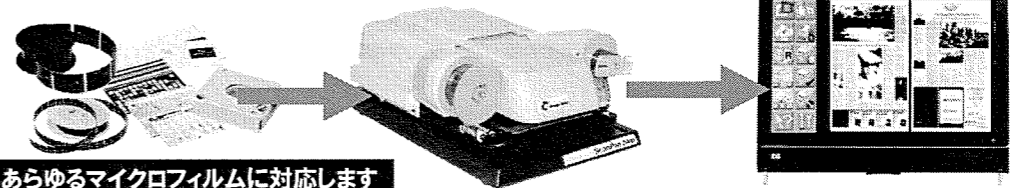
※ Web 販売価格は、法人所屬のお客様が BookWeb Pro でご注文され、付帯作業を伴わない納品を行い、弊社標準書式による請求書を発行し、遅滞なくお支払い頂く場合、あるいは、クレジットカードまたは口座振替でお支払い頂く場合に適用される販売価格です。(2008.12)

<https://pro.kinokuniya.co.jp> よりご利用頂けます。

株式会社 紀伊國屋書店 営業企画部 Tel: 03-6910-0527 E-mail: [bwpro@kinokuniya.co.jp](mailto:bwpro@kinokuniya.co.jp)

高速マイクロフィルムビューワー&スキャナ

# スキャンプロ 2000 ScanPro2000



あらゆるマイクロフィルムに対応します

マイクロフィルムをもっと使いやすく



|                                       |                |
|---------------------------------------|----------------|
| ScanPro2000/マニュアルロール COMBO (手動)       | ¥1,344,000(税込) |
| ScanPro2000/モーターキャリア COMBO (電動)       | ¥1,617,000(税込) |
| ScanPro2000/モーターキャリア COMBO (電動・3M 対応) | ¥1,732,500(税込) |

※本体価格とは別に「搬入・据付調整費」¥105,000 と「教育費」¥21,000 を申し受けます。  
※上記構成には、PC 装置・モニターは含まれておりません。別途ご用意が必要になります。

### ◆かんたん操作でマイクロ資料の利用を促進

使い勝手の悪さから利用者に敬遠されがちなマイクロ資料ですが、専用スキャンソフトウェアを使って誰でも簡単な操作スキャンニングができますので、ご所蔵の資料の利用促進に活用できます。

### ◆高速スキャン(1 秒)、グレースケール

標準機能でグレースケールをサポートし、最大 600DPI のスキャンニングでも 1 秒で画像を取り込みます。高速、高品質のスキャンニングが可能です。

### ◆パソコンのプリンタで印刷が可能に

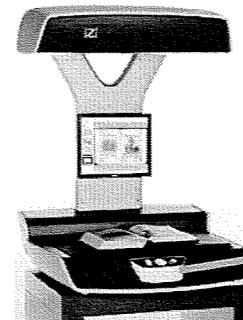
ウィンドウズ PC に接続することで、パソコンに接続されているプリンタでの印刷が可能になります。従来のマイクロリーダーを利用している印刷に比べ、コストの軽減をはかれます。

### ◆設置面積は A3 サイズ以下の超コンパクト設計で省スペース

設置面積は A3 サイズ以下であり、デスクトップタイプのスキャナーですので、PC の隣りに置いてご使用いただけます。重量も 9Kg で持ち運びも簡単です。

### ◆7~54 倍ズームレンズを標準装備/レンズ交換の煩わしさが不要に

ズームレンズ(7~54 倍)が標準装備されていますので、様々な倍率のマイクロフィルムのスキャンニング、またはコマの一部の拡大取り込みを 1 台で行えます。



超高速 A2 サイズ対応カラーブックコピー

## OS12000 BookCopy

誰もが簡単操作で高精度のブックコピーおよびスキャンニングすることを可能にした電子化時代の「インフォメーションコピー」です。大学図書館・資料室での閲覧者への利用サービスが大幅に向上されます。

カラー原稿をわずか 4 秒で超高速読取り (A2/300dpi 時)

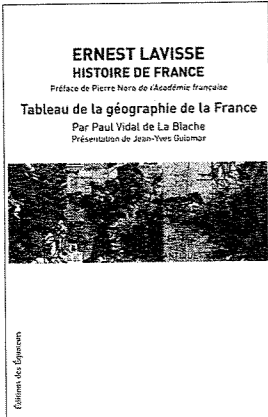
本体価格: **¥4,987,500** (税込)

全ての操作はコントロールパネルで行え、初めての利用者の方でも簡単に操作できます

機能説明・デモンストレーション承ります。お申し付けください

**極東書店**  
FAR EASTERN BOOKSELLERS

〒101-8672 東京都千代田区神田神保町 2-12 安富ビル ☎03(3265)7531 FAX03(3265)4656  
URL: <http://www.kyokuto-bk.co.jp> E-mail: [info@kyokuto-bk.co.jp](mailto:info@kyokuto-bk.co.jp)  
〒530-0047 大阪市北区西天満 2-10-2 幸田ビル ☎06(6362)5515 FAX06(6362)8882  
〒604-0985 京都市中京区麩屋町通丸太町下 井口ビル ☎075(231)2093 FAX075(231)3859  
〒810-0073 福岡市中央区舞鶴 1-3-14 小櫃ビル ☎092(751)6956 FAX092(741)0821



## ERNEST LAVISSE - HISTOIRE DE FRANCE 復刻版 — ラヴィス編「フランス史」全27巻

並装本 15 x 24 cm 各巻共 3,150円 全27巻セット価格 85,050円

前世紀初頭エルネスト・ラヴィスにより編纂された「フランス史」(全27巻)がこのたび復刻されることになりました。フランスの伝統的国民史であるラヴィスの「フランス史」は、社会史を重視するアナール学派などにより長らく否定的な評価を与えられてきましたが、ピエール・ノラの「記憶の場」など歴史学の新たな動きの中で、近年その再考証、再検討の必要性が語られ始めていました。

昨年9月に第1巻が、その後第8巻まで刊行済み(2010年5月現在)、来年末には完結予定。各巻とも約400頁。詳細タイトルご希望の方はお申し付け下さい。単品でのご注文も可能ですが、廉価本のうえ発行部数が限られており今後既刊本の品切れも予想されますのでセットでのご注文をお勧めします。(上記価格は税込み価格。為替レートの変動により変更あり)

« Pourquoi lire aujourd'hui, pourquoi rééditer ces 27 volumes de l'Histoire de France d'Ernest Lavisse ? Parce que ce monument est l'expression indépassable d'un grand moment historique et national, au croisement d'une histoire en train de se faire scientifique et d'une République en train de se faire définitive, du début du XXe siècle (1903) au lendemain de la guerre (1922).

Un miroir de réfraction, le socle d'un édifice en partie détruit, en partie indestructible et dans lequel nous vivons encore, un roman qui nous permet une meilleure compréhension de ce que nous sommes par le récit de ce que nous ne sommes plus. »  
(ピエール・ノラ、復刻版初巻序文より)

フランス学術図書専門店  
**ガリア書房**

〒606-8225 京都市左京区田中門前町90 (京都大学本部北門前、百万遍交差点より徒歩1分)  
tel: 075-702-6548 fax: 075-702-6223 email: info@galliasob.jp http://galliasob.jimdo.com

〈アールツ教授講演会録2〉

### 中世ヨーロッパの医療と貨幣危機

ある君主の検屍報告と貨幣不足問題の分析

エーリック・アールツ／藤井美男 監訳

A5判・108頁・2,520円

ベルギーのカトリック・レウヴェン大学のアールツ教授が2009年に行った訪日2度目の講演会録。第I章は、若きブラバント公が1430年夏に急死した原因を追究する異色の社会史的論考である。第II章は、中世後期ヨーロッパの危機を貴金属貨幣の不足という視点から考察する。いずれも、検屍解剖書や会計簿、造幣所データなど膨大な史料に基づく緻密な論証である。

〈アールツ教授講演会録〉

### 中世末南ネーデルラント経済の軌跡

ワイン・ビールの歴史からアントウェルペン国際市場へ

エーリック・アールツ／藤井美男 監訳

A5判・96頁・1,575円

2004年に行われたアールツ教授の講演集。ヨーロッパ史の中でも最も輝かしい光芒を放ったネーデルラント社会経済の光と影を活写する。

## 九州大学出版会

〒812-0053 福岡市東区箱崎7-1-146 (価格税込)  
電話 092 (641) 0515 http://www.kup.or.jp/

### ヨーロッパ中世古文書学

ジャン・マビヨン／宮松浩憲 訳

B5判・762頁・14,700円

### フランス・ルネサンス王政と都市社会

リヨンを中心として

小山啓子

A5判・296頁・5,670円

### 中世前期北西スラヴ人の定住と社会

市原宏一

A5判・244頁・4,725円

### ヴェストファーレン条約と神聖ローマ帝国

ドイツ帝国諸侯としてのスウェーデン

伊藤宏二

A5判・216頁・3,990円

### フランス中世都市制度と都市住民

シャンパーニュの都市プロヴァンを中心として

花田洋一郎

A5判・354頁・6,090円

### フランス第二帝制の構造

野村啓介

A5判・320頁・5,880円

〈刊行予定〉

### 中世盛期西フランスにおける都市と王権

大宅明美

2010年9月刊行予定

### ローマ帝国の食料供給と政治

宮崎麻子

2010年11月刊行予定

## YAMAKAWA LECTURES

### ⑥ 中世ヨーロッパの教会と俗世

フランツ・フェルテン=著 甚野尚志=編 1575円  
ヨーロッパ中世社会のなかで、教会はいかなる役割を担ったのか。中世教会史研究の新たな潮流を示す、フェルテン先生の歴史学講義。

### ⑦ グローバル化と銀

デニス・プリン=著 秋田茂/西村雄志=編 1575円  
16世紀を「銀の世紀」とよび、アメリカ・アジア・ヨーロッパを結ぶ銀の流通から世界史を論じる、プリン先生の歴史学講義。

イスラームを知る 各1260円

6 新月の夜も十字架は輝く 菅瀬晶子=著  
[中東のキリスト教徒] さまざまな教派が錯綜する中東キリスト教世界の実像を探る。

7 イスラームへの回帰 松本ますみ=著  
[中国のムスリマたち] 農村の貧困地帯で差別される中国ムスリマの厳しい現実と、教育に未来を託す彼女たちの姿をオーラルヒストリーで描く。

## アメリカ史研究入門

有賀夏紀・紀平英作・油井大三郎=編 2625円

アメリカ史を学ぶ学生をはじめ、研究者にも役立つ、各時代・テーマの論点を解説した入門書。通史・テーマ編に加え、文献・インターネット・文書館の紹介も含む充実した資料編も収録。

## 近刊—イギリス史研究入門

近藤和彦=編 [6月刊行] 予価2625円

議会を中心とする近代政治のモデルをなしたイギリス。その伝統ある歴史研究へのアプローチの方法を、主要なテーマから明らかにする。2000点に及ぶ資料文献リストとともに、研究入門の決定版。

## 古代地中海世界のダイナミズム

[空間・ネットワーク・文化の交錯]

桜井万里子/師尾晶子=編 A5判 432頁 7350円  
古代ギリシア人がポリスを築いた前8世紀からキリスト教がローマ帝国に根づいた古代末期までの1500年間に光を当て、その歴史像を示す「西洋古代史」の論文集。

## 山川出版社

〒101-0047 東京都千代田区内神田1-13-13 税込  
電話 03-3293-8131 http://www.yamakawa.co.jp

岩波モダンクラシックス

スเปน帝国の興亡 114691  
J.H.エリオット/藤田一成訳 四六判 定価5040円  
世界史で重要な意味をもつハプスブルク朝スเปนの二五〇年に及ぶ興亡の跡を、鮮やかに再現し、その原因を解明した見事な歴史叙述。

ドイツの独裁 (I) (II) 114691  
K.D.ラッパ/山口定・高橋進訳 四六判 (I) 定価5040円 (II) 定価4830円  
ナチス・ドイツをドイツ一國の問題としてではなく、近代ヨーロッパの胚胎した権威主義的国家観と政治観との帰結として扱った歴史的名著。

赤いゲツベルス 114691  
星乃治彦 四六判 定価2940円  
反ファシズムの急進的青年労働運動の指導者として、「赤いゲツベルス」と呼ばれたミンツェンベルクとは誰だったのか。

古代メソポタミアの神話と儀礼 114691  
月本昭男 A5判 定価770円  
「歴史のはじまり」に紡ぎ出された神観念・宇宙像・死生観を探る。創成譚、死者供養とト占の文書に読む、世界観の知られざる祖型とは。

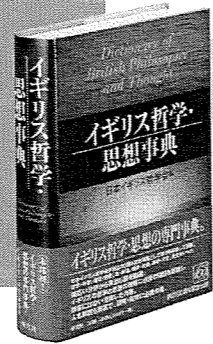
近世ヨーロッパの言語と社会 114691  
ピーター・パーク/原聖訳 四六判 定価3570円  
言語間の摩擦、競争、混合、純化と統一——言語と様々な社会的集団との重層的な関わり合いを描き出す、新しい言語社会史の試み。

[定価は消費税5%込みです]

岩波書店

〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋2-5-5  
http://www.iwanami.co.jp/

# イギリス哲学・思想事典



イギリス哲学・思想の  
専門事典！

事項編 183、人名編 371。哲学・科学、倫理・宗教、法・政治、経済・社会、美学・文学、歴史といった幅広い分野から見出し語を厳選。イギリスの哲学と思想の理解に必須の項目を詳説し、類書にはない充実した内容。人名解説も豊富で、研究・教育に必携の書。

日本イギリス哲学会(編)  
A5判 上製 780頁  
定価8,400円(本体8,000円+税)



## イギリスのモラリストたち

「人間の本性」「感情と理性」「幸福と理想」をめぐる近代イギリスのモラリストたちの議論を紹介。マンデヴィル、シャフツベリ、パトラー、ホブズ、ヒューム、アダム・スミス、ベンサム、ジョン・ステュアート・ミルら、12名を取り上げた。

柘植尚則(著)  
四六判 248頁  
定価2,625円(本体2,500円+税)

## イギリス哲学の基本問題

イギリス文化の精神的バックボーンをなす経験論哲学の伝統を、時代を追って概観した入門書。

寺中平治・大久保正健(編)  
四六判 230頁 定価2,415円(本体2,300円+税)

研究社 〒102-8152 東京都千代田区富士見 2-11-3 TEL 03(3288)7777 FAX 03(3288)7799 ●http://www.kenkyusha.co.jp

## 世界史の鏡 樺山紘一編

【既刊9冊/毎月配本予定】各刊 四六並製 平均160頁 ¥1680

- 新しい時代の新しい歴史101冊 [内容見本呈]
- 歴史家たちのユートピアへ―国際歴史学会の百年
- 樺山紘一著 〇巻 ◆歴史家の苦悩と喜びを振り返る
- ハイチの栄光と苦難―世界初の黒人共和国の行方
- 浜忠雄著 地域6 ◆独立後200年の危機を解く、ハイチから見た世界史
- イタリア都市の諸相―都市は歴史を語る
- 野口昌夫著 都市4 ◆歴史が麗になつて見える都市
- 本を読むデモクラシー―読者大衆の出現
- 宮下志朗著 情報3 ◆日仏庶民の読書初めはいつか?
- ナイル―地域をつむぐ川
- 加藤博著 地域7 ◆文明の十字路/人種と民族のつぼ
- イブラヒム、日本への旅―ロシア・オスマン帝国・日本
- 小松久男著 地域10 ◆アジア主義者との深い絆
- 中国明末のメテオ革命―庶民が本を読む
- 大木康著 情報4 ◆500年前中国で、絵入り小説大流行
- ジハードの町タルスース―イスラーム世界の狭間
- 太田敬子著 都市3 ◆聖戦のための前線基地
- 森と川―歴史を潤す自然の恵み 新刊
- 池上俊一著 環境9 ◆中世ヨーロッパ世界の人と自然

【価格は税込】  
〒101-0065 千代田区西神田2-4-1  
東方学会本館

刀水書房

tel. 03-3261-6190 fax. 03-3261-2234  
http://www.tousuishobou.com

好評発売中

## 百年戦争 中世末期の英仏関係

城戸毅著  
本邦初の本格的百年戦争の全体像  
四六上製 三二〇頁 ¥三二五〇  
〔刀水歴史全書80〕

## 近代スロヴァキア国民形成思想史研究

近世国民国家の形成

中澤達哉著  
スロヴァキア国民形成理論の構築とその特徴を解明する最新の研究  
A5箱 四五〇頁 ¥七三三〇

## 階級という言語

イングランド労働者階級の政治社会史 (人間科学叢書44)

G・ステッドマン・ジョーンズ著/長谷川貴彦訳 A5上製 三三〇頁 予価四七〇〇円

ヨーロッパの北の海 北海・バルト海の歴史と文化

D・カービー、M・ヒンカネン著/玉木俊明他訳 A5上製 四三〇頁 予価六三〇〇円

十字軍の歴史

A・ジョーティスキ著/森田安一訳 A5上製 四五〇頁 予価六〇〇〇円

## 武士と騎士

小島道裕 編 日欧比較中近世史の研究  
人間文化研究機構連携研究として、日仏で行われた国際シンポジウムの成果。

- I 領主と武力 城と領主権(エリック・ブルナゼル) 西欧中世における貴族・騎士と封建制(渡辺節夫) 中世ヨーロッパにおける騎士と弓矢(堀越宏一) 日欧甲冑比較論序説(近藤好和) 出陣図屏風に描かれた近世軍制(笠谷和比古)
- II 城の形と機能 中世における城(アンヌ・マリ・フランパル・エリシエ) 中世における西欧地中海沿岸地方における農村部の城と定住(エチエンヌ・ユベール) 日本中世における城と領主権力の二面性(井原今朝男) 日欧城郭比較論(千田嘉博)
- III 資料とイメージ 城における領主を描いた中世の図像(ベリニス・マヌ) 洛中洛外図屏風と描かれた公武関係(小島道裕) 頼朝のイメージと徳川将軍(大久保純一) 日本中世における「武家文書」の確立過程とその諸相(高橋一樹) 中・近世武家書札の文化史(マルクス・リュッターマン)
- IV 理念と言説 近世武家の年中儀礼と言説(大友一雄) 旧幕臣と武士道(岩淵令治) 「武士道」研究の現在(佐伯真一) 資源化される歴史(新谷尚紀) 中世を比較する(M・コラルデル/P・スイリ)

▶ A5判・500頁/定価 9,450円

## キリシタン大名の考古学

別府大学文化財研究所・九州考古学会・大分県考古学会編  
考古学的成果のみならず、文献学や分析科学などの他領域の成果も融合することで、モノや遺跡の世界から「キリシタン大名」「大航海時代」を見直す。

▶ B5判・178頁/定価 3,990円

## 思文閣出版

〒606-8203 京都市左京区田中関田町 2-7 ☎ 075(751)1781 皇内容見本  
http://www.shibunkaku.co.jp/ F 075(752)0723 (価格税込)

## 王権と都市 今谷明 編

国際日本文化研究センターでの共同研究の成果。本書は日本、アジア・イスラーム、ヨーロッパの3領域から11篇の論文を収め、各時代・各地域での都市史のあり方を相互に比較検討し、「都市とは何か」に挑む。

▶ A5判・372頁/定価 7,140円

## 公家と武家 IV 笠谷和比古 編

官僚制と封建制の比較文明的考察

日文研での公家(貴族)と武家に焦点を合わせた共同研究。武士層が成長した地域と、文官支配が優越した地域との差異に着目し、多角的に考察。【内容】日本/東アジア/中東・西欧 ▶ A5判・544頁/定価 8,925円

## 公家と武家 III 笠谷和比古 編

王権と儀礼の比較文明的考察

今回は王権と儀礼に注目した17篇。【内容】I 日本[古代と中世]/II 日本[近世]/III 東アジア/IV 中東・西欧

▶ A5判・458頁/定価 8,190円

## 国際シンポジウム 公家と武家の比較文明史

笠谷和比古 編

国際日本文化研究センターでの共同研究の一環として開催されたシンポジウムの成果。【内容】I 文人型社会と戦士型社会/II 王権と儀礼/III 貴族とは何か/IV 封建制度と官僚制度/V 思想・宗教・文化

▶ A5判・490頁/定価 8,400円

## ドイツ現代史学会 2010年大会 (第33回)

期日: 2010年9月18・19日(土・日)

会場: 関西大学高槻キャンパス (大阪府高槻市)

<http://www.kansai-u.ac.jp/global/guide/access.html#takatsuki>

- 18日 13:00~17:30 自由論題 ~ 東西若手研究者4人の個別報告 ~
- 17:30~18:00 総会
- 18:00~20:00 懇親会など

19日 10:00~16:00 シンポジウム「ドイツ史のなかの68年」

報告者: 井関正久(中央大学)・田中晶子(京都市立芸術大学・兼)・水戸部由枝(明治大学)

コメンテーター: 小熊英二(慶応義塾大学)・高橋秀寿(立命館大学)

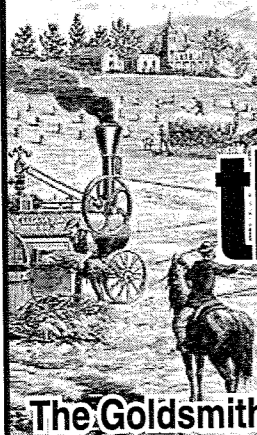
司会: 西田慎(神戸大学)

(以上、2010年5月25日現在)

ドイツ史以外の非会員の方々の参加も歓迎いたします! 会場での入会手続きも可能です。大会の詳細については、ドイツ現代史研究会のホームページをご参照下さい。自由論題などの内容については、随時更新する予定です。<http://www.soc.nii.ac.jp/ssmgh/gakkai.html>

\* 会誌『ゲシヒテ』はドイツ現代史研究会が編集発行する研究誌です。ご関心のある方は、当研究会のホームページをご覧ください。<http://www.soc.nii.ac.jp/ssmgh/gesch.html>

「近代」のルーツを探る世界最高の社会経済史コレクション  
「ゴールドスミス・クレス」がオンラインになりました



# The Making of the Modern World

「G-K」の社会科学系図書61,000点、  
定期刊行物466点をフルテキスト収録

The Goldsmiths-Kress Library of Economic Literature 1460-1850

## 社会科学系学術図書データベース

The Making of the Modern World (MoMW) は、1460年代から1850年までの経済史・経営史・社会思想史を中心とする社会科学関係の書籍61,000点、および同年代に創刊された定期刊行物466点を収録し、フルテキスト検索を可能にする一大データベースです。収録資料は社会科学系の歴史的コレクションとして最高のものと言われる、ゴールドスミス文庫とクレス文庫の蔵書を原本としており、総ページ数は1200万ページにも及びます。

### 新たな研究の地平を切り開く フルテキスト検索

文中の一語一句まで探し当てるフルテキスト検索により、タイトルだけでは推測できない意外なコンテンツの発見や、調査の網から漏れていた文献を拾い出すことが可能になります。従来、こうした資料の利用は主に経済思想史・社会経済史の研究者に限られていましたが、本データベースでは関心のある主題やキーワードに沿ったピンポイントの探索が可能になったことで、文学史、女性史、科学技術史など社会・人文科学の広い範囲に応用されることも期待できます。



**無料  
トライアル  
実施中**

検索サイトに「雄松堂 MOMW」で検索下さい。詳細ページにアクセスできます。

株式会社 **雄松堂書店**

Home Page: [www.yushodo.co.jp](http://www.yushodo.co.jp)

本社：〒160-0002 東京都新宿区坂町 27 Tel: 03-3357-1411(代) Fax: 03-3356-8730 E-mail: [sales@yushodo.co.jp](mailto:sales@yushodo.co.jp)  
京都：〒604-8101 京都市中京区御池通柳馬場角 京都朝日ビルディング5F Tel: 075-222-0165(代) Fax: 075-256-2032 E-mail: [kb@yushodo.co.jp](mailto:kb@yushodo.co.jp)

### 私と 西洋史研究

—歴史家の役割

川北稔著／聞き手・玉木俊明  
四六判上製 2,625円

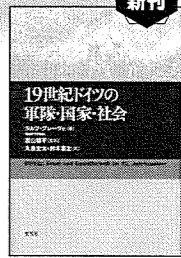
半世紀にわたる研究生活を回顧、戦後史学の動向、画期をなした諸研究の背景、歴史家の役割など歴史研究に必須のテーマを語る。待望の個人研究史＝史学概論。



### 19世紀ドイツの 軍隊・国家・社会

R. プレーヴェ著／阪口修平監訳  
丸島宏太、鈴木直志訳  
四六判上製、3,150円

「軍隊と社会」学派の旗手プレーヴェによる軍事史研究の最新入門書。経済・社会・文化・技術史など多岐にわたる研究動向を解説。史料・文献情報、索引も充実。



### 戦闘技術の歴史 1 古代編

S. アングリムほか著／松原俊文監修  
4,725円

歩兵や騎兵の役割、部隊配置、攻囲戦や海戦の戦術など戦闘の実際を多数のカラードラマを交えて解説。巻末に用語解説付。



### 戦闘技術の歴史 2 中世編

M. ベネットほか著／浅野明監修 4,725円

兵器の技術的進歩、指揮系統の発達、攻城戦や海戦の全容など、中世に大きな進化を遂げた戦闘の実際を丹念に読み解く。



### 図説 聖書人物記

絵画と家系図で描く100人の物語

R.P. ネットホルスト著／山崎正浩訳  
3,780円

旧約・新約に登場する人物100人を聖書のストーリーに沿って紹介。壮大なドラマの歴史的・文化的背景を詳しく解説。

### 地図と絵画で読む Biblica 聖書大百科

B. J. バイツェル監修／船本弘毅日本語版監修／山崎正浩訳者代表  
神学・考古学の最新の知見に基づき、聖書世界の歴史・文化・地理を読み解く。図版650点以上、地図124点を収録。 33,600円

### ローマ・カトリック教会の歴史

E. ノーマン著／百瀬文見監修／月森左知訳 カトリック教会の起源から近現代の教会の展開までの通史。図版150点を収録。3,990円

### ピラミッド以前の古代エジプト文明

—王権と文化の揺籃期

大城道則著 3,675円

### 古代エジプトトラベルガイド

S. ブース著／月森左知訳 1,575円

### 古代エジプト・ファラオ歴史誌

P. クレイトン著／吉村作治監修 3,465円

### 古代エジプト女王・王妃歴史誌

J. ティルディスレイ著／吉村作治監修 3,780円

### 古代ローマ歴史誌

P. マティザック著／本村凌二監修 3,780円

### ローマ皇帝歴史誌

C. スカー著／青柳正規監修 3,465円

### ローマ教皇歴史誌

P. G. マックスウェル＝スチュアート著／高橋正男監修 3,465円

### 中国皇帝歴史誌

A. バールダン著／稲畑耕一郎監修 3,465円

### ロシア皇帝歴史誌

D. ウォーンズ著／栗生澤猛夫監修 3,780円

### ムガル皇帝歴史誌

F. ロビンソン著／小名康之監修 4,410円

### 古代マヤ王歴史誌

S. マーティンほか著／中村誠一監修 3,780円

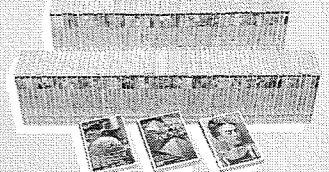
### 旧約聖書の王歴史誌

J. ロジャーソン著／高橋正男監修 3,465円

### 「知の再発見」双書シリーズ

四六判並製、各巻1,470～1,680円（現在146巻）

フランス・ガリマル社の百科全書シリーズの翻訳。歴史・考古学・音楽・科学など人類の「知の遺産」を各ジャンルの第一人者が平易に解説。日本ではまず掲載不可能といわれる膨大な貴重図版もカラーで収録。ビジュアル双書の決定版。



〒541-0047 大阪市中央区淡路町4-3-6  
Tel.06-6231-9010 Fax.06-6233-3111

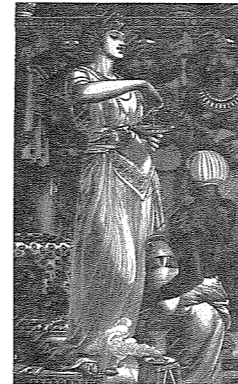
**創元社**

<http://www.sogensha.co.jp/>

〒162-0825 東京都新宿区神楽坂4-3  
煉瓦塔ビル Tel.03-3269-1051  
〈価格はすべて税込〉



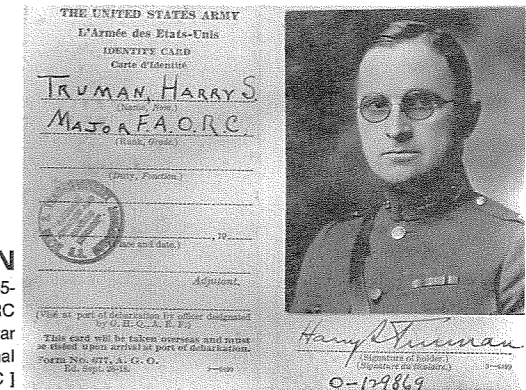
社会、経済、歴史、地理、環境…  
幅広い年代とジャンルを網羅した  
800万枚を超えるフォトストックを、  
あなたの大学にアカデミック価格でお届けします。



**Cleopatra VII**  
(69-30 BC) queen of Egypt, last of Ptolemaic dynasty, dissolving pearls in wine. Illustration by Frederick Augustus Sandys (1832-1904) for Algernon Charles Swinburne's (1837-1909) poem published in "The Cornhill Magazine" 1866 London

**Harry S. TRUMAN**

1884-1972, 33rd American President (1945-1953), his identity card as Major FAORC during the first world war  
Photo Credit: [ The Art Archive / National Archives Washington DC ]



すべてのデジタル素材は、アカデミックユースでの著作物二次利用許諾済みです。教材、論文、授業や学会でのプレゼンテーションなどに、煩雑な著作権処理なしでご利用いただけます。

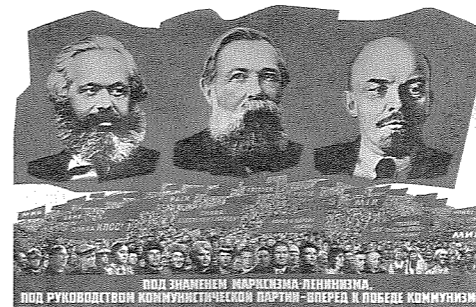
**Picture dated 28 August 1944**

showing american army parading on the Champs Elysees after the liberation of Paris.



**Affiche avec Karl Marx,**

Engels et Lénine. URSS. Texte : "Sous l'étendard du marxisme-léninisme, sous la direction du PC : en avant vers la victoire du communisme". RVB-1605



**無料トライアル実施中！！**

圧倒的なデータ量とそのクオリティをぜひ体感してください。  
お申込みはウェブサイトから。

<http://www.afpwaa.com>

1835年の設立以来、正確・中立・公正を守り続ける歴史と信頼のAFP通信 (Agence France-Presse) が、厳密な倫理規定のもとで取材した写真と映像、さらに速報性の高いニュース記事を、日本国内の教育機関向けに提供するデータベースサービスです。

**AFP World Academic Archive**

学校法人文化学園 アカデミックアーカイブセンター

〒151-8521 東京都渋谷区代々木 3-22-1 Tel: 0120-021-311 info@afpwaa.com

**日本西洋史学会第60回大会 報告要旨集**

2010年5月29日発行

編集・発行：日本西洋史学会第60回大会準備委員会

〒874-8501 大分県別府市北石垣 82  
別府大学文学部史学・文化財学科気付

E-mail: seiyoshi60@gmail.com

<http://www.soc.nii.ac.jp/jswh/2010/>

# 19C/20C HCPP Online [英国議会資料オンライン版 1801-2004年]

共同購入コンソーシアム結成により画期的な特別価格にてご購入可能です。

是非ともこの機会をご利用下さい。(コンソーシアム募集期限:平成23年3月末まで)

弊社刊行の総索引CD-ROM版も研究用・教材用に特価にて提供中です(¥94,500)。併せてご活用願います。

# U.S.CSS, 1817-1980 [米国議会資料オンライン版]

  
弊社日本販売総代理店

19世紀:1817-1899年 (15-55th. Congress) 本体¥2,425,000 [税込] アクセス保守料金 ¥72,765 [税込]

20世紀:1900-1980年 (56-96th. Congress) 本体¥3,049,200 [税込] アクセス保守料金 ¥91,746 [税込]

いずれも学生数 18,000 以下の場合の価格 Continuation 1981-1994 will be completed soon, and offered separately.

英国議会資料・米国議会資料の同時ご利用をお薦めいたします。

オーストリア国立図書館所蔵

MEMORY OF THE WORLD

【世界の史料遺産】登録

パンフレット 謹呈

## THE ATLAS BLAEU -- VAN DER HEM

ファン・デル・ヘム氏蒐集「アトラス ブラウ」

図版・注釈付目録 全6巻及び補冊付〔全7巻〕

¥525,000 [税込] 日本販売総代理店

Africa-Asia-America

FACSIMILE EDITION IN 8 VOLUMES

including 500 views, maps and charts

概算価格 ¥12,000,000 (税込)

# 文生書院

〒113-0033 東京都文京区本郷6-14-7 電話 (03) 3811-1684  
Fax (03) 3811-0296 e-mail: info@bunsei.co.jp

待望の6月刊行!

# 西洋古典学事典

松原國師 著

A4判上製・1720頁・294000円

わが国初の本格的『西洋古典学事典』で、ギリシア・ローマ世界の関連事項を約四五〇〇項目収録。読者の便宜を図り、古典語・各近代語の表記を掲載し、膨大な数の系図の他、地図、年表等も収録。

\* 百年の快著

\* この事典には松原氏の個性が横溢している。

\* 西洋古典学における真に独創的な書物の出現を喜びたい。

中務哲郎氏 (京都大学名誉教授・西洋古典学・西洋古典叢書編集委員)

“学術的に驚異の労作。

見ているだけでも想像力が刺激される。”

山内昌之氏 (東京大学大学院教授 国際関係史・イスラム史)

● 損保ジャパン記念財団賞・NPO学会 林雄二郎賞 受賞

## チャリテイとイギリス近代

金澤周作 著

A5判・439頁・52500円

18世紀半ば以来のイギリスにおける百年余に及ぶチャリテイ実践の歴史をはじめて活写する。救貧法史や福祉国家形成史、近代化論や帝国史が描けなかった福祉社会のもう一つの源。

## アルプスの農民紛争

服部良久 著

52005円

— 中・近世の地域公共性と国家

放牧地をめぐる村落共同体間の紛争記録から、ティロル地域社会における公共意識形成を跡づける。日本中世史への西洋史からの応答。

京都大学学術出版会

606-8305 京都市左京区吉田河原町15-9 京大会館内(価格は税込)  
http://www.kyoto-up.or.jp/ TEL 075-761-6182 FAX 075-761-6190